IUIC

岩手大学 国際交流センター 報告

第1号

岩手大学国際交流センター

2005年4月

目　次

－巻頭言－

「国際化に果たす国際交流センターの役割―センター報告を創刊するにあたって―」
国際交流センター長　猪内正雄 -------1

－研究ノート・報告－

「岩手大学生の国際交流に関する意識調査―センターの方向性を考える―」　尾中夏美---------- 3
「コンピュータの多言語化と留学生の学習支援」　中村ちどり ---------- 9
「日本語教育オンライン教材の可能性」　松岡洋子 ---------- 16

－教育部門報告－

日本語特別コースおよび国際交流科目日本語科目実施報告 ---------- 23
日本語研修コース実施概要 ---------- 30
全学共通教育科目（日本語）---------- 33
全学共通教育科目（日本事情） ---------- 34
日本語・日本文化研修コース ---------- 37
日本語研修コース、日本語・日本文化研修コース修了発表会 ---------- 38
夏季休暇中および春期休暇中日本語補講報告 ---------- 39
平成 16 年度外務省長期青年招聘事業研修報告---------- 40
日本語・日本文化研修生修了レポート作成報告 ---------- 43
教員研修プログラム個別指導報告 ---------- 45
理工系留学生教育・指導について ---------- 47

－国際企画部門他報告－

海外での国際交流センターの活動記録---------- 49
米国アーラム大学サイスプログラム関連事業報告 ---------- 53
西北農林科技大学サマースクール報告---------- 57
海外留学支援報告 ---------- 61
学生交流支援活動報告 ---------- 64
国際交流会館活動記録 ---------- 66
北東北国立 3 大学外国人留学生合同合宿研修会報告---------- 71
留学生研修旅行実施要項 ---------- 75

－資料－

国際交流センター組織図 ---------- 79
平成 16 年度留学生関連行事 ---------- 80
外国人留学生集計表 ---------- 81
国際交流協定締結状況 ---------- 83
平成 16 年度岩手大学海外派遣・留学プログラム一覧 ---------- 85
平成 16 年度海外学生派遣実績 ---------- 86
岩手大学留学生地域派遣実績一覧---------- 87

国際化に果たす国際交流センターの役割
—センター報告を創刊するにあたって—

国際交流センター長　猪内正雄（理事・副学長）

センターの主要な任務：外国人留学生支援と国際交流の企画・実施

岩手大学国際交流センターは、平成 16 年 4 月からの法人化にともなう学内組織の見直しの一環として、これまでの留学生センターの機能を拡充することを目的として設置されました。

これまでの留学生センターは、外国人留学生の日本語教育と修学および生活支援を目的として設置されたものですが、新設の本センターはこれらに加えて、これまで研究協力課で行ってきた外国人研究者受入れおよび本学教職員の海外派遣など国際交流活動のコーディネートおよびサポート業務を行うことを目的としています。

国際化に関する基本計画の特徴：国際交流の重点化

岩手大学では今年度、国際化に関する基本計画として「国際化の理念・目的及び基本計画」を策定しましたが、そのなかで強調した点は、次の 3 点です。

— 岩手大学における国際化の重要性；岩手大学はこれまで教育研究の基盤を地域において発展してきましたが、近年あらゆる分野で国際化が進む中で、地域との連携活動を質的に発展させる上からも大学の国際化を進める必要があります。

— 国際交流活動の重点化；岩手大学は広く世界の国々との交流活動を通して国際化に取り組んでいかなければなりませんが、特にこれまで留学生の受入れや研究者による技術交流活動などの実績がある東アジアを中心とする国々との交流を重点的に行うこととしています。

— 外国人留学生に対する支援強化；外国人留学生の受入れは岩手大学の特色ある分野を中心に行い、特に優秀な私費留学生の受入れにあたっては修学および生活上の支援を強化する方針です。

基本計画の実施：センターが中心的役割

国際交流センターは、今後「岩手大学における国際化の基本計画」に沿って、その実現に向けた活動を行わなければなりません。

今後、外国人留学生に対する支援業務については従来以上に強化しなければなりませんが、加えて新たに付加された研究上の国際交流および国際貢献活動に対するコーディネート・サポート業務については、教職員の運営組織および予算措置などについて見直し検討を行い、センターの本来的使命・

機能を発揮することが重要だと思っています。

センター報告の目的：活動報告と自己点検

本センター報告は、センターにおける１年間の活動報告を中心に、センター等の教職員による研究レポートおよびセンターの業務資料を加えた年報で、センターの活動を学内外に詳らかすると共に、センターとしての自己点検資料としての性格を持たせたものです。

センターの運営に対する忌憚のないご意見と、今後のセンターのあり方に対してのご指導を頂戴できれば幸です。

岩手大学生の国際交流に関する意識調査
—センター活動の方向性を考える—

尾中夏美（岩手大学国際交流センター）

1. はじめに

岩手大学の留学生センターは平成13年4月の学内措置での発足を経て、平成14年4月に正式発足した。平成16年度より留学生のみならず大学全体の国際化を推進するという重責を担って留学生センターは国際交流センターとして新しいスタートを切ったのである。

留学生センターができる以前にも留学生は受け入れており、日本人学生との交流があったであろう。しかし、実際に日本人学生と留学生との接触がどの程度あり、日本人学生が留学生をどのように見ているのか、果たして日本人学生の意識が留学生との接触でどの程度変化しているのだろうか。留学生センターが本格的に始動するにあたって、その時点での岩手大学生の意識を記録し、それを基にして様々な交流の機会や意識啓発に役立つような企画を立てていくことで、効果的にセンター事業運営を行う一助としたいとの意図から本調査を実施することにした。

2. 手法と質問の内容について

この調査は平成14年10月に実施した。留学生センターが正式発足して半年後である。調査対象は各学部3年生でアンケート回答者の所属と男女別人数は表1のとおりである。当時の学部生の人数は約5300名で在籍する留学生総数は176名であった。（アンケートの質問項目に関しては最後の参考資料を参照のこと）

表1.アンケート回答者の所属一覧

学部	人文社会科学部		教育学部		工学部		農学部		全学部	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人数	3	47	18	32	47	17	20	15	88	111
合計	50		50		64		35		199	

3年生を調査対象に選んだ理由は大学生としての生活が十分に長く、4年生に比較して大学キャンパスで過ごす時間も長いことにある。学部により男女比にばらつきがあるので、男女別のデータは集計していない。

3. 調査結果

3.1 大学入学までの国際交流経験について

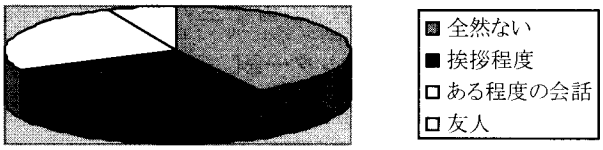
大学入学以前に外国人との交流経験があるかどうかの問いに対して、「ある」と回答したのは全体の58%であった。経験者のうち交流の経験が「英語指導助手との会話」と答えたのが 70%で、あとは語学学校や海外派遣などが17%で、知人や友人などはごく少数であった。この内容から日本人以外との接触経験は約半数の学生が経験するにとどまり、接触のあった学生も欧米系に偏っていることがわかる。

3.2 留学生との接触の度合いと質について

岩手県内で一番留学生が多く、文化的多様性に満ちたキャンパスで3年間を過ごした学生がその間どの程度留学生と接触や交流を持ったかについては、大変興味深い。

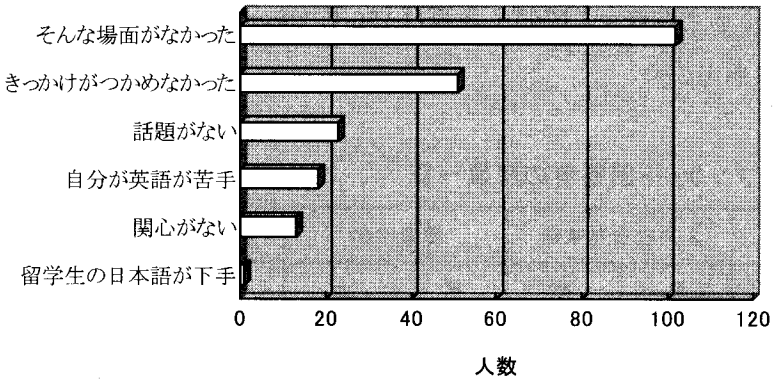
「大学に入学してから現在までに、留学生と言葉をかわした経験がありますか」という問いに対する回答が図 1 である。「全然ない」と「挨拶程度」をあわせると69%になりキャンパスという場は共有していても交流と呼べるような状況にないことがわかる。

図1. 大学入学から現在まで留学生と会話した経験があるか



ではなぜ日本人学生は留学生と会話を持たないのだろうか。その理由が図 2 である。複数回答であるが、この図から「話したくないわけではないけど、なにをいつ話せばいいかがわからない」という状況が見て取れる。少数意見では「留学生が周りにいない」「接点がない」といった意見が出された。興味深いのは以前、筆者が留学生から日本人と友達になりたいが日本語に自信がないし、なにを話しかければいいのかきっかけがつかめない、と相談された経験があることだ。お互いに友達になりたいのに、双方とも同じ理由でそのチャンスが作れないという状況のようである。図 2 には「自分が英語が苦手」ということで、留学生との交流には英語が必要だと誤解している学生の存在も伺える。交流のための「場」を設定することで、このような状況を変える手助けができるかもしれないと感じられた。

図2. 留学生とあまり会話をしなかった理由(複数回答)



逆に「ある程度まとまった会話をしたことがある」「かなり頻繁に留学生と接しており、よく話している」を選んだ 33%の学生のうちの 63%は授業が交流の場面となっておりサークルやアルバイト先などはごく少数にとどまっている。これは私費留学生にとってはサークルに加入するだけの時間的、経済的余裕がな

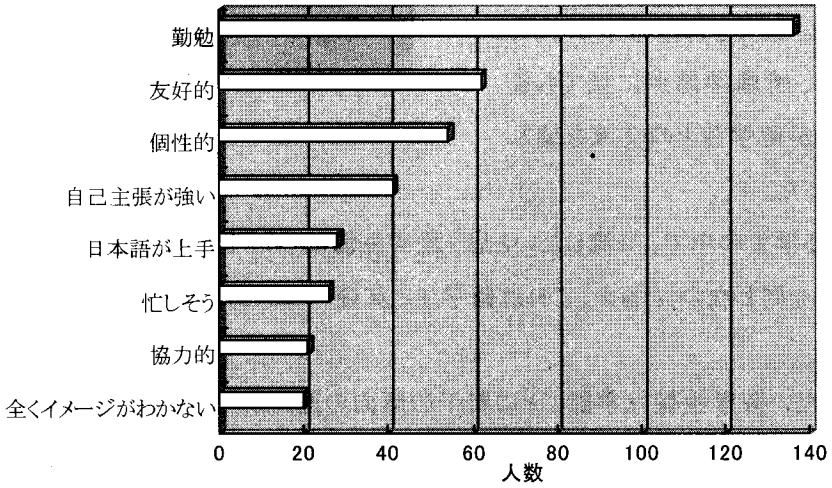
いこと、アルバイトは日本人学生と職種が違うことなどが考えられる。

3.3 留学生のイメージについて

岩手大学の日本人学生は留学生に対してどのようなイメージを持っているのだろうか。もし、仮に否定的なイメージを持っているようであれば友好的な交流を進めることは難しくなるだろう。

図 3 は留学生に対するイメージへの問いに対する回答である。用意された選択肢から選び、自分のイメージが選択肢にない場合には記入するという形式で回答してもらった。

図3. 留学生に対するイメージ（複数回答）



これを見ると「勤勉」が突出していることがわかる。「友好的」「個性的」と続き概ね好意的なイメージを持っていることがわかる。「自己主張が強い」はやや否定的ではあるが、日本人に比べて自分自身の意見をはっきり出し納得がいくまで話し合うという態度がそのように受け止められているのだろうと推測される。「忙しそう」というのは、大きく分けてふたつの理由が考えられる。ひとつは同じ課題を仕上げる場合日本人に比べて留学生は多くの労力を強いられるから勉強に費やす時間が自ずと増える。二つ目の理由は私費留学生が経済的な理由からアルバイトに追われる生活を送っているからであろう。「全くイメージがわかない」とした意見はイメージを抱けるほど留学生との接触がなかったのではないだろうか。

少数意見として否定的なイメージは「プライバシーについて軽率」「しつこい」「やたら触る」「ずるい」などがあり、肯定的なイメージとしては「お金持ち」「頭がいい」「積極的」「勇気がある」「努力家」などが上げられていた。否定的なイメージには多分に異文化間のギャップと考えられる認識の違いがあるものと思われる。「やたら触る」というのは身体接触の度合いは文化によってかなり異なるため、日本人には不快に受け止められる親しさの表現があったのかもしれない。また、プライバシーの考え方も文化によって解釈が分かれるところであり、「しつこい」は留学生が相手の意思（拒否）を言葉や態度から理解できず同じ要求を繰り返した可能性がある。それが、文化的背景からなのか留学生個人の性格からくるものかを判

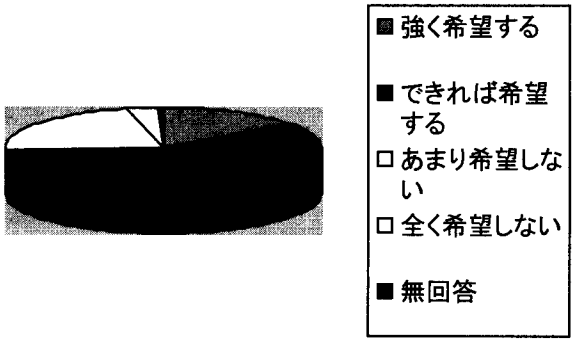
断できるほど交流の機会が多くない可能性も残る。

3.4 留学生との交流の意義について

学生生活の中で、決して悪いイメージは持っていないけれど自分から積極的に留学生との交流の機会を作ることのできなかった日本人学生が多いことが、この調査を通して徐々にわかってきた。それでは日本人学生は留学生との交流を希望し、また交流することに何か意義があると感じているのだろうか。

「留学生と友達になりたいという希望はありますか」という問いに対する回答が図 4 である。「強く希望する」と「できれば希望する」を合わせて76％で、所属学部別に見ても各学部で半数以上が留学生との交流を望んでいることがわかった。

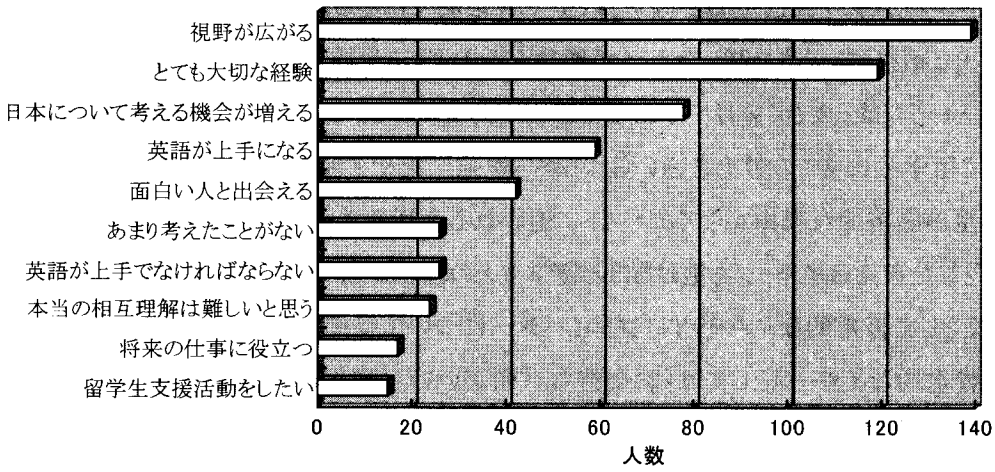
図4.留学生との交流希望について



交流を希望する学生の中で、交流したいと思う留学生像について質問したところ複数回答で 99 名が「気が合えば国籍を問わない」と答え、これは留学生と友達になりたいという希望をもつ学生の 66％を占めている。

しかし、交流したい留学生像は学部ごとに若干の傾向の違いが見られる。欧米研究のある人文社会科学部や工学部では「欧米系の留学生」との友人関係を望む学生が他学部より多く、農学部では「専攻が同じ留学生」に多かった。

図5.留学生との交流についての考え（複数回答）



留学生との交流について、どのように考えているかの回答をまとめた結果が図 5 である。「視野が広がる」「とても大切な経験」など全体的に留学生との交流に肯定的な価値を認める結果が得られた。岩手

大学の留学生の約三分の二は中国からの留学生であり、特に学部での受講している学生は日本語でのコミュニケーションに支障をきたすことは少ない。しかし、この図から「英語が上手になる」「英語が上手でなければならない」と考えている学生が多く、留学生との交流は英語で行うものという認識を持っている学生が多いことがわかる。

4　考察と今後の活動の方向について

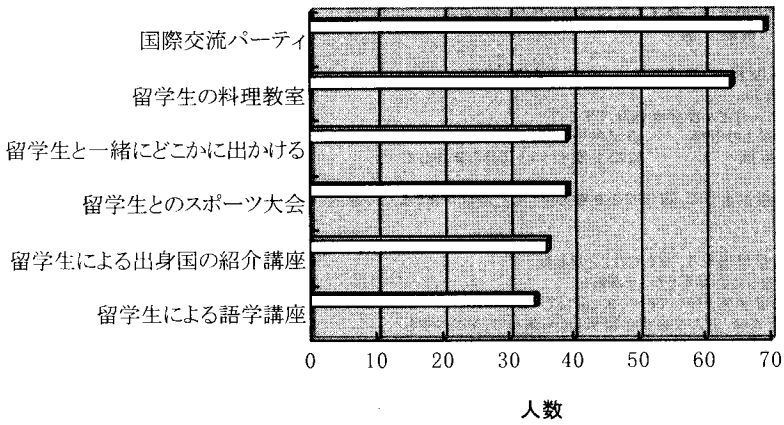
4.1 考察

今回の意識調査から「交流の場の設定」や「やる気の支援」などにより、留学生と日本人学生の交流がもっとスムーズに行われる可能性が高いことがわかった。

(1) 交流の場の設定

留学生とは交流してみたいけどどうきっかけを作ったらいいかわからない、というのが日本人学生の本音のようである。参加してみたい交流プログラムについてあげられたのが図 6 である。国際交流パーティーと留学生の料理教室に人気があることがわかる。

図6.参加してみたい留学生との交流プログラム(複数回答)



この意識調査が終了したころに大学内に国際交流サークルが結成された。このサークルは留学生会と協力して年 1 回のガーデンパーティーを企画・運営したり、スポーツ大会を催したりと活発に活動しており、センターも活動を支援している。また、市民団体企画の国際交流行事などは掲示板に掲載するなどしてより多くの留学生や日本人学生が参加できるよう情報提供にも力を入れている。今後も様々な仕掛けを作っていくことが重要であろう。

(2) やる気の支援

留学生との交流をとおして徐々に目が世界に向き始めた学生の意欲を支援し、学生の知的好奇心を

満足させるような国際交流事業を企画していかなければならない。海外への研修や留学プログラムに関する情報を提供したり、経験者の体験報告を聞く会を催すなどたくさんの可能性がある。

4.2 今後の活動の方向性

この調査を実施したのは留学生センターが正式に発足してまだ六ヶ月しか経っておらず目に見えるような企画がまだ立てられる状態ではなかった。実際、アンケートの中で留学生センターの存在を知っているかどうかの問いに対して「知っている」が 33%、「聞いたことがある」が 26%で「知らない」が 40%、無回答 1%であった。「留学生センターの活動について関心がありますか」という問いには「あまり関心がない」「全く関心がない」をあわせて56%と留学生センターの存在が日本人学生とどうかかわりを持つのかが理解されていない状況であった。

今年度「留学生センター」から「国際交流センター」に改称したことにより、“留学生だけのための施設”というイメージから大学全体の国際交流にかかわる施設であることがより判りやすくなったといえよう。今後、定期的に学生の意識調査を実施して国際交流センターの活動理念がどのくらい学生の意識改革に役立っているかを検証しながら企画を立てていきたいと思う。

参考資料

日本人大学生の留学生との交流に関する意識調査（2002年10月）

所属学部：人社　教育　高額　農学
性別：男　女

① 大学入学以前に、外国人との交流経験がありましたか？
ある　ない
①-1 「ある」と答えた人はどんな交流経験ですか？
英語指導助手との会話　語学学校に通って
海外派遣に参加　国際交流イベントに自ら参加して
その他（　　）

② 大学に入学してから現在までに、留学生と言葉をかわした経験がありますか？
A. 全然ない
B. ごく簡単な挨拶程度なら、交わしたことがある。
C. ある程度まとまった会話をしたことがある。
D. かなり頻繁に留学生と接しており、よく話している。
②-1 C.D.を選んだ人は、どんな場面か選択しから選んで、**いくつでも**○をつけてください。
A.授業で B.学生食堂で C.クラブやサークルで D.バイト先で
E.その他（　　）
②-2 A.B.を選んだ人は、理由を以下から**いくつでも**選んで○をつけてください。
A.話しかけるきっかけがつかめない。
B.なにを話せばいいか話題に困った。
C.そのような場面がなかった。
D.関心がない。
E.留学生は日本語が不自由なので話すのが面倒だ。
F.日本人学生同士の方が盛り上げれるのでわざわざ留学生と友達にならなくてもよい。
G.自分は英語が苦手だから。
H.その他（　　）

③ あなたの留学生についてのイメージについて、選択肢から**いくつでも**○をつけてください。
A.勤勉　B.自分勝手　C.自己主張が強い
D.協力的　E.非協力的　F.日本語が上手
G.日本語が下手　H.個性的　I.プライドが高い
J.友好的　K.非友好的　L.忙しそう
M.暇そう　N.親切　O.全くイメージがわかない
P.その他（　　）

④ 留学生と友達になりたいという希望はありますか？
A.強く希望する B.できれば希望する C.あまり希望しない
D.全く希望しない
④-1「強く希望する」「できれば希望する」と答えた人へ。どんな留学生と友達になりたいですか。
A.中国の留学生　B.中国以外のアジアの留学生
C.欧米系の留学生　D.専攻が同じ留学生
E.英語で会話ができる留学生　F.気が合えば国籍はどこでもよい
G.その他（　　）

⑤ 留学生との交流を持つことについてどう考えますか？選択肢から**いくつでも**○をつけてください。
A.とても大切な経験　B.あまり考えたことがない
C.視野が広がる　D.面倒くさい
E.面白い人と出会える　F.時間的な余裕がない
G.英語が上手になる　H.出身国によっては交流してもよい
I.将来の職業に役立つ　J.関心が持てない
K.日本について考える機会が増える　L.約に立たない
M.本当の相互理解は難しいと思う　N.英語が上手でなければならない
O.先進国の留学生とならともかく、途上国の留学生とは交流したくない
P.留学生を支援する活動をしてみたい
Q.その他（　　）

⑥ 留学生と交流をするなら、どんなプログラムに参加してみたいと思いますか。選択肢から**いくつでも**○をつけてください。
A.留学生による出身国の紹介講座　B.留学生の料理教室
C.国際交流パーティー　D.留学生とのスポーツ大会
E.日本文化を紹介するイベント　F.留学生と一緒にどこかにでかける
G.留学生と協力して何かを企画する　H.誰かが企画したものに参加
I.留学生による語学講座　J.その他（　　）

⑦ 岩手大学に留学生センターが解説したことを知っていますか。
A.知っている　B.聞いたことがある　C.知らない

⑧ 留学生センターの活動について関心がありますか。
A.大変関心がある B.やや関心がある C.あまり関心がない
D.全く関心がない

⑨ 留学生センターにどんな活動を期待しますか。期待するものに○をつけてください。選択肢にない場合にはその他の項目に具体的に記入してください。
A.留学生による出身国の紹介講座　B.留学生の料理教室
C.国際交流パーティー　D.留学生とのスポーツ大会
E.日本文化を紹介するイベント　F.留学生と一緒にどこかにでかける
G.留学生と協力して何かを企画する　H.日本人のための海外留学相談
I.留学生による語学講座　J.その他（　　）

ご協力ありがとうございました。

コンピュータの多言語化と留学生の学習支援

中村ちどり（岩手大学国際交流センター）

1. 留学生の学習・生活支援とコンピュータ

日本で生活する外国人留学生にとって、コンピュータは欠かせないものになっている。論文やレポートの執筆、学習・研究のための情報収集などはもちろん、生活上必要な情報を得るためにもコンピュータによるインターネット使用が重要度を増している。

しかしながら、教育機関における外国人用コンピュータへの支援対策は十分とは言えない。日本語が不自由な外国人にとって、日本語 OS(オペレーティング・システム)上でのコンピュータの使用が難しかったり、また母語による情報収集がしたくてもコンピュータ上で母語での読み書きができないなどの問題点がある。

岩手大学国際交流センターでは、留学生のコンピュータ使用を支援するため、平成 14 年度からセンター保有のコンピュータについて多言語化と学習ソフトのインストールを行っている。また平成 15 年度からは、岩手大学総合情報処理センターが国際交流センターと協力して大学全体の教育用端末についても多言語化を進めている。以下では岩手大学における留学生用コンピュータの現状について報告する。

2. 岩手大学の留学生用コンピュータの概要

岩手大学では各学部や図書館、総合情報処理センターなどに、教育用端末として学生が使用できるコンピュータを設置しており、これらのコンピュータには一部を除き Windows2000 の日本語 OS が入っている。また国際交流センターにも、Windows2000／XP の日本語 OS を持ったコンピュータが外国人留学生用として置かれている。これらのうち、多言語対応処理が終わっているコンピュータは次のとおりである。

(1) 総合情報処理センター 2 階教育用端末室(39 台) 月～金 8:30～17:00

(2) 図書館 2 階 マルチメディア情報閲覧室(45 台) 月～日(図書館開館時)

(3) 学生センター棟 2 階 就職情報室(18 台) 月～金 8:30～20:00

(4) 学生センター棟 2 階 国際交流センター談話室(6 台) 月～金 8:30～17:30(留学生専用)

(5) 国際交流会館 2 階 集会室(3 台) 月～日(居住者優先)

(6) 国際交流センター授業・課外活動用 携帯型コンピュータ 数台

(1)～(3)は日本人学生と留学生の両方が使用できるが、(4)～(6)は留学生専用である。(1)～(3)については総合情報処理センターが、(4)～(6)については国際交流センターが多言語化と保守管理を行っている。これ以外の教育用端末、特に各学部の教育用端末室に設置されているコンピュータについては、多言語化利用の設定はされていない。

3. 多言語対応の内容

教育用端末では Windows 上で日本語を含む 11 の言語について多言語化を行っている[1]が、以下にその概要を示す。

(1) 言語と入力システムの設定

教育用端末の Windows 2000(日本語版)上で使用可能な言語の種類とキーボードレイアウト・入力システムは表 1 の通りである[2]。言語の切り替えは、タスクバー上で言語・入力方式を示すアイコンをクリックするか、キーボード操作(ショートカットも利用可能)で行うようにしてある。

表 1: 教育用端末の Windows2000 上で使用可能な言語と入力システム

言語	キーボードレイアウト／入力システム
日本語	日本語 (MS-IME2000)
英語(U.S)	米国
中国語(中国)	中国語(簡体字) MS-PinYin98
韓国語	韓国語(ハングル) MS-IME98
ロシア語	ロシア語
タイ語	タイ語 Kedmanee
ベトナム語	ベトナム語
アラビア語(エジプト)	アラビア語 (101)
ドイツ語(ドイツ)	ドイツ語
フランス語(フランス)	フランス語
ヒンディー語	ヒンディー語トラディショナル

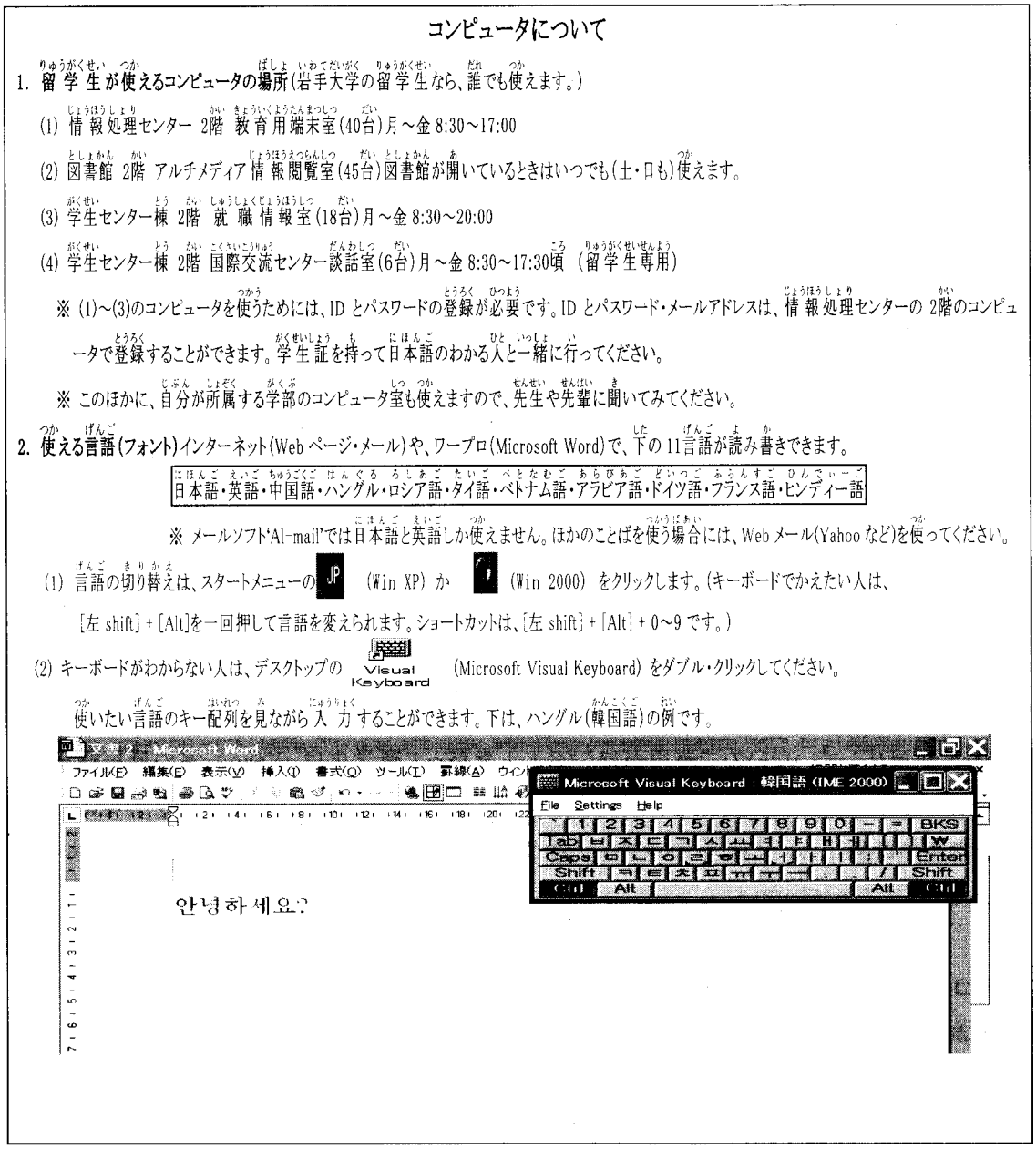
これ以外の言語については教育用端末上で入力・保存することはできないため、留学生から要望があった場合には国際交流センターの端末で使用できるようにしている。本来は留学生全ての母語に対応することが好ましいが、多くの言語の切り替えを表示すると煩雑になる。したがって現時点では、スペイン語・ポルトガル語などについては使用可能にしていない。また、ミャンマー語やベンガル語、ウィグル語などについては、教育用端末の Windows にはフォントも IME も入っていないため使用することができない。ミャンマー語については学生からの要望があったため、フォントを入れて国際交流センター内の端末で使用できるようにした。

(2) オンスクリーン・キーボード

文字入力に慣れていない人のためのツールに、キーボード上の文字配列をデスクトップの上で示すオンスクリーン・キーボード・プログラムがあり、これにより文字の配列を覚えていなくても、キーを

打つことができる。留学生の中には母国でコンピュータを使用した経験が少なく、母語でのブラインド・タッチができない者が多くいる。このような学生達は、キーボード上に日本語とアルファベットしか書かれていないコンピュータでは母語入力ができない。したがって、補助ツールとしてのオンスクリーン・キーボードは留学生用コンピュータにとっては欠かせない。教育用端末では、11 言語全てに対応している Microsoft Visual Keyboard[3]をデスクトップ上に置いて、ダブルクリックすることにより起動できるようにした。言語を切り替えると自動的に Visual Keyboard 上の言語も切り替わるため、使用言語のキー配列を画面で見ながら入力することが可能である。図1の下部にオンスクリーン・キーボードの使用例が載せてある。

図 1: 留学生配布用 コンピュータ多言語対応の説明(日本語版)



コンピュータについて

1. 留学生が使えるコンピュータの場所(岩手大学の留学生なら、誰でも使えます。)

(1) 情報処理センター 2階 教育用端末室(40台)月～金 8:30～17:00

(2) 図書館 2階 アルチメディア情報閲覧室(45台)図書館が開いているときはいつでも(土・日も)使えます。

(3) 学生センター棟 2階 就職情報室(18台)月～金 8:30～20:00

(4) 学生センター棟 2階 国際交流センター談話室(6台)月～金 8:30～17:30頃 (留学生専用)

※ (1)～(3)のコンピュータを使うためには、ID とパスワードの登録が必要です。ID とパスワード・メールアドレスは、情報処理センターの 2階のコンピュータで登録することができます。学生証を持って日本語のわかる人と一緒に行ってください。

※ このほかに、自分が所属する学部のコンピュータ室も使えますので、先生や先輩に聞いてみてください。

2. 使える言語(フォント)インターネット(Web ページ・メール)や、ワープロ(Microsoft Word)で、下の 11言語が読み書きできます。

日本語・英語・中国語・ハングル・ロシア語・タイ語・ベトナム語・アラビア語・ドイツ語・フランス語・ヒンディー語

※ メールソフト'Al-mail'では日本語と英語しか使えません。ほかのことばを使う場合には、Web メール(Yahoo など)を使ってください。

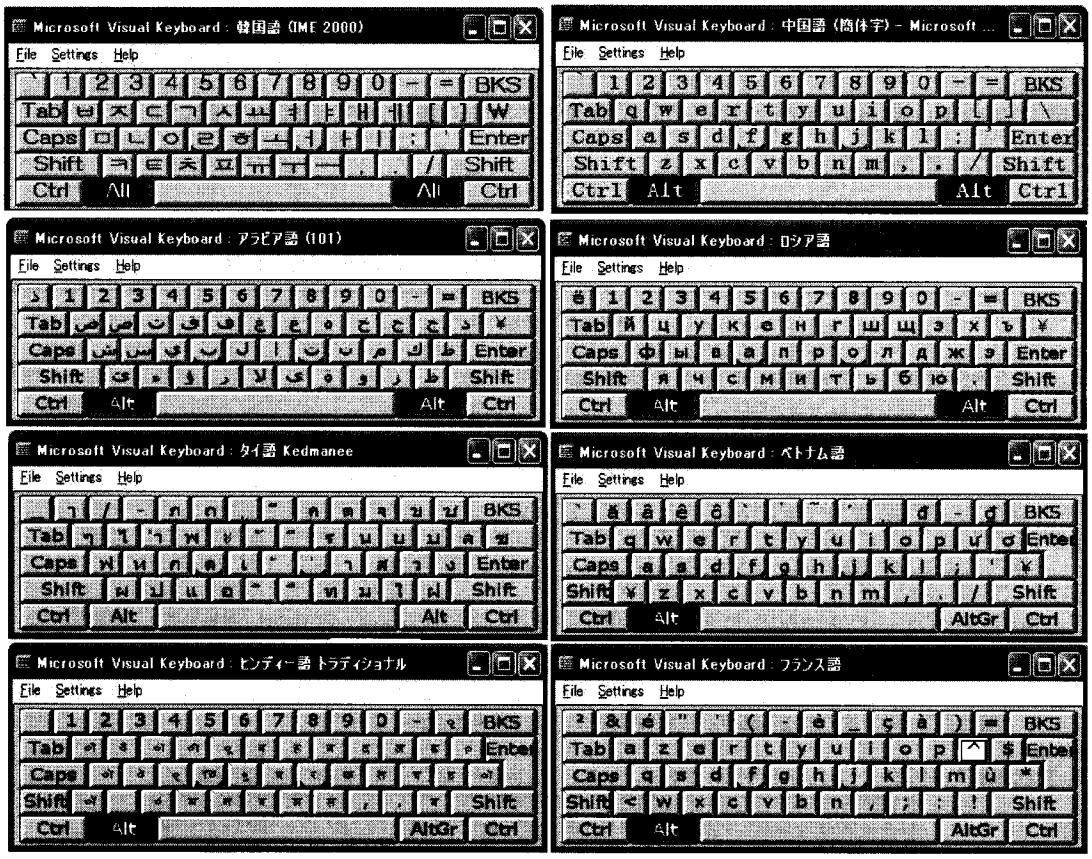
(1) 言語の切り替えは、スタートメニューの JP (Win XP) か (Win 2000) をクリックします。(キーボードでかえたい人は、[左 shift] + [Alt]を一回押して言語を変えられます。ショートカットは、[左 shift] + [Alt] + 0～9 です。)

(2) キーボードがわからない人は、デスクトップの Visual Keyboard (Microsoft Visual Keyboard) をダブル・クリックしてください。

使いたい言語のキー配列を見ながら入力することができます。下は、ハングル(韓国語)の例です。

またオンスクリーン・キーボードのないコンピュータでもキー操作を行えるように、国際交流センターでは希望する学生に多言語のキー配列を示した電子ファイル・文書を配布している(図 2)。

図 2: 留学生配布用 多言語のキーボードレイアウト一覧



(3) 使用可能なソフトウェア

教育用端末において多言語対応が可能なソフトウェアは、インターネットブラウザ、ワープロ、表計算ソフトウェア等である。メールについては、教育用端末ではAl-mailが入っているがこのソフト自体が多言語対応していないので使用ができない。したがって留学生は、Yahoo 等の無料電子メールサービスで母語のメールのやりとりを行う場合が多いのが現状である。文章構成ツールに関しては、留学生の母語についてはスペル・チェックしたいという要望が高くないため、多言語のスペルチェッカーは特に入れていない。

(4) コンピュータ使用に関するオリエンテーション

以上が多言語対応についての概要であるが、コンピュータが多言語に対応していても留学生がそれを知らなければ使用できないため、日本語以外の言語の使用について留学生に周知する必要がある。国際交流センターは毎学期、学期初めに外国人留学生に向けた生活と学習について

のオリエンテーションを開いているが、コンピュータについても図 1 のような文書を各国語で配布し、日本語と中国語・英語で説明を行っている。

4. 学習支援

(1) コンピュータ教育

留学生の中には母国であまりコンピュータを使用していない学生が多くいる。またコンピュータ使用には精通していても、日本語での入力作業ができない全くできない学生も多い。したがって留学生へのコンピュータ教育は不可欠である。国際交流センターでは学部等で情報処理教育を受ける機会のない大学院生や研究生に対して、コンピュータ教育を行っている。主な内容は、「日本語入力」「日本語のホームページの閲覧」「プレゼンテーション・ソフトの使用」「ホームページ作成」等である[4]。この教育は主に総合情報処理センターの教育用端末を使用して行われるため、同時に多言語対応の説明と母語の入力についても指導している。

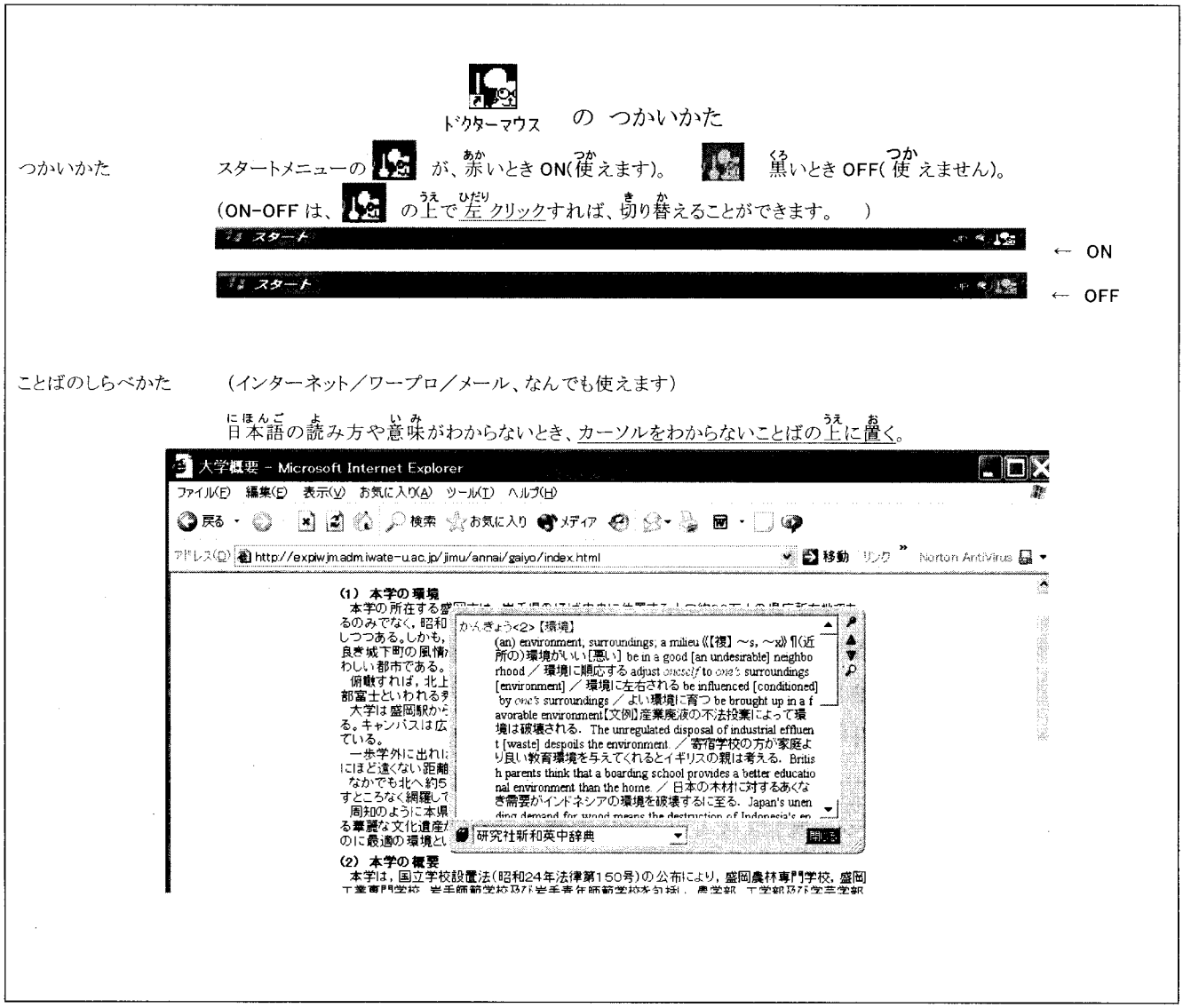
(2) コンピュータ用教材・インターネットによる日本語教育

近年、コンピュータを利用した日本語教育が行われるようになっているが、国際交流センターではこれまで主に文字学習と自習用にコンピュータ教材を使用してきた。特にひらがな・かたかな・漢字の習得には繰り返しの復習が欠かせないため、CD-ROM 教材を使ってコンピュータで学習するように指導しており、図書館と国際交流センターでは、学生が教材とヘッドフォンを借りて自習できるようになっている。また、岩手大学工学部の Lesson/J [5]をはじめ、最近はインターネット上で日本語を学習できる Web ページも多くあるが、この中で特に有用と思われるものを選び、「役に立つ日本語学習用のホームページ一覧」として URL を記した電子ファイルを学生に配布している。教師の管理のもとに日本語を独習する本格的な日本語学習教材については、今春から導入される予定である。また今後の課題として、音声認識を行うコンピュータ教材を通じて学習者の発音チェックが行われるようになれば、学生が声を出して独習できる環境が必要になると考えられる。

(3) 辞書

留学生がコンピュータ上で日本語を読む際の問題点として、漢字の読み方がわからないために意味を調べるのに時間がかかるということがある。この問題は特に非漢字圏出身の学生にとって深刻な問題となっている。インターネットに接続しオンライン辞書で読み方を検索することもできるのだが、うまく利用できない学生も多い。そこで、国際交流センターのコンピュータには「ドクターマウス英和／和英／国語辞典」(ジャストシステム)[6]を入れ、わからない単語にマウスを重ねただけで読み方と日本語・英語の意味を知ることができるようにしており、図 3 のような使用説明を日本語・中国語・英語・韓国語で作成している。

図 3: 留学生用 辞書ドクターマウスの使いかた説明(日本語版)



5. 今後の課題

以上、岩手大学の留学生用コンピュータの多言語化と学習支援の現状について示した。今後の課題としては、多言語対応の教育用端末を増やすこと、留学生が必要とする言語にできる限り応じること、多様な日本語学習教材に対応したコンピュータ・環境を用意すること等が挙げられる。また、日本語が全くできない留学生・研究者のために Windows OS 自体の多言語化も検討する必要がある。

留学生の修学にとって多言語対応のコンピュータは欠かせないものである。加えて、コンピュータを通じた留学生・外国人同士の情報交換・ネットワークづくりは、生活面・精神面の支えとなるだけでなく、災害時のライフラインとしても非常に重要である。さらに、コンピュータを多言語化することは、

大学で様々な言語を学んでいる日本人学生にとっても有益な学習支援となる。今後も、留学生と日本人学生の両方にとって使いやすいコンピュータを増やしていかなければならない。

注:

1) Windows の多言語化にあたっては、大阪外国語大学ホームページ「多言語同時処理室」を参考にした。URL: http://mlang1.osaka-gaidai.ac.jp/~tagengo/
2) 表1で示された言語について、他のキーボードレイアウト・入力システムを使用する場合は、コントロールパネルのキーボードの設定で入力ロケールの変更をすることにより選択することができる(Windows2000 の場合)。
3) Microsoft Visual Keyboard はフリーソフトであり、マイクロソフト社のホームページからダウンロードできる。ただしインストールの際は一度 Windows の言語を英語に設定する必要がある。
4) 初級クラスでのコンピュータ教材として、『留学生のための日本語コンピュータ』(深澤のぞみ・濱田美和・後藤寛樹編著、富山大学留学生センター2002 年)を利用している。
5) Lesson/J (岩手大学工学部三輪研究室) URL: http://sp.cis.iwate-u.ac.jp/sp/lesson/j/
6) ドクターマウス (ジャストシステム) URL: http://www.justsystem.co.jp/drmouse/user.html

謝辞:

教育用端末多言語化の実行にあたられた総合情報処理センターの加治卓磨氏、付属図書館教育用端末での日本語学習にご協力いただいた竹谷隆則氏に感謝します。

日本語教育オンライン教材の可能性

松岡洋子(岩手大学国際交流センター)

1. 日本語オンライン教材活用の現状

IT技術の発展に伴い、日本語教育でもその活用が行われている。オンライン教材はインターネットの WEB 上に公開された教材で、日本語教育、学習用として近年多くの教材が開発、活用され、教育効果をあげている。岩手大学国際交流センターでは、WEB 上に公開されたオンライン教材のいくつかについて、学生用ラウンジのコンピュータ上やフロッピーディスクで URL を学生に紹介し利用を推奨してきた。

日本語教育・学習オンライン教材には表記、音声、語彙などの学習用のほか、読解支援、能力判定などさまざまなタイプのものがある。以下にオンライン教材の実例をいくつかあげる。

＜学習用＞

○大阪大学　Global Campus Net,Osaka

大阪大学の留学生、外国人研究者を主な対象とするコミュニティーサイトである Global Campus Net,Osaka の一項目として日本語オンライン学習がある。基礎日本語、理工系日本語、キャンパス単語帳、実践日本語、就職活動という5項目があり、留学生、研究者の自主学習を支援する。

http://www.gcn-osaka.jp/japanese/index.html

○(社)国際日本語普及協会(AJALT)　オンライン教材

国際日本語普及協会が作成した一般向けのオンライン教材のサイトである。語彙、会話、読解用の学習教材７項目で構成され、入門から上級までカバーする自習用教材である。　http://www.ajalt.org/online/online.html

○Nihongoweb

大学等の日本語教師グループが開発した日本語教育用サイトで、その中に「日本語の練習」「平仮名・カタカナ」「日本語のクラス」「助数詞の練習」というオンライン教材と、「ことわざ辞典」「和製英語」という辞書ツールが掲載されている。

http://www.nihongoweb.com/

岩手大学工学部三輪研究室　オンデマンドネットワーク型日本語音声教育システム日本語の文、単語、音節、子音、特殊拍、アクセントなどの音声について学習するクイズ形式のオンライン教材である。この教材は CD-ROM でオフライン利用も可能となっている。

http://sp.cis.iwate-u.ac.jp/sp/lesson/j/indexj.html

＜能力判定＞

○岩手大学工学部三輪研究室　iCampus

http://www.sp.cis.iwate-u.ac.jp/icampus/icampus.jsp

このサイトでは日本学生支援機構の日本留学試験日本語科目の試験問題を利用した日本語能力判定ができるようになっている。

＜読解支援＞

○東京国際大川村研究室 リーディングチュウ太

日本語文の読解に役立つ辞書ツールと語彙および漢字のレベルをチェックする機能を有する読解支援用サイトである。また、教材バンクや読解クイズで学習の支援も行う。

http://language.tiu.ac.jp/about.html

このほかにも多数のオンライン教材があり、さらに教師向けに教材バンクおよび教材作成サイトも存在する。これらのオンライン教材を利用した教育、学習活動の研究報告も近年多く見られるようになった。

しかし、現在岩手大学国際交流センターの日本語教育、日本語学習支援活動においてはオンライン教材の活用は限定されたものである。先に述べたように学生に対してオンライン教材サイトの利用が奨励されているが、利用状況の客観的把握や授業と連動させたオンライン教材の活用等は行われていない。

現在、岩手大学においては留学生の受け入れ形態が多様化する一方、授業時間数の増加やカリキュラムの多様化などでの対応は人的、経済的制約上、困難な状況にある。この問題を解決する方法のひとつとして、オンライン教材の有効活用が重要である。

2. 新しいオンライン教材の導入

2.1 学習過程へのオンライン教材の取り込み

オンライン教材の利点はいつでも、どこでも、誰でも利用できることにあるが、この特徴は欠点にもつながる。すなわち、学生が教材をいつ、どこで、どのように使っているのかわからなければ、学生が効果的に教材を活用しているかどうか把握できず、「使いっぱなし」の状態になってしまうことになるということである。単にオンライン教材の利用を学生に奨励するだけでは効果は得られない。オンライン教材を授業の一環として利用するなど教師(あるいは学習支援者)が介入すべきであろう。

学習過程への教師の介入を前提にして設計されたオンライン教材として(株)アルク開発のネットアカデミー英語版がある。この教材は現在、全国 200 以上の高等教育機関等で利用されている。ネットアカデミーは教育機関に管理サーバーを設置し、イントラネットを通して学生に教材を提供するオンライン教材である。ネットアカデミーの大きな特徴は LAN を経由した教材の配信と学習履歴

の管理にある。学生は教育機関のイントラネットを経由して端末に配信された教材で学習を進める。インターネットを通じた配信では特に音声教材などの配信がスムーズにいかないことがあるが、LANではその問題は解消される。また、管理者は学生の学習進捗状況を WWW ブラウザ上で把握し、学習履歴をサーバーで一括管理する。このように学習履歴をサーバー上で管理することで、教師は学習者に対して学習上の助言を与え、より効果的なシステムの活用が可能となる。ネットアカデミー英語版は岩手大学でも人文社会科学部および工学部の専門英語教育用教材として 2004 年に導入され、2005 年中に利用対象を拡大する計画がある。

すでにネットアカデミーを導入した教育機関での活用報告を見ると、単にネットアカデミーの活用を学生に奨励しただけでは利用は拡大せず、効果も上がらないことがわかる。その原因として、折本(2005)はコンピュータを利用した学習では学習者とコンピュータが一対一の閉じられた活動になり、インプット中心の単調なものになりがちであることを指摘している。その課題を解決する方策として、折本はオンライン教材でのインプット活動と、授業でのアウトプット活動を組み合わせた利用法を提示している。また、学習のステップ、レベルを学習者に合わせて細やかに設定し、実力より少し上のレベルの課題に挑戦させて能力向上を実感させることが重要だと述べている。

2.2 ネットアカデミー日本語コースの開発

上述の英語コースに続き日本語コースが 2004 年に作成された[1]。ネットアカデミー日本語コースは語彙、聴解、読解、能力試験ミニテストの 4 コースからなり、語彙コース以外のそれぞれが日本語能力試験[11]の 1 級(上級)から 4 級(初級前半)の各レベル別に構成されている。学習者は各自の日本語能力に応じ、レベル別、スキル別に学習を進めることができる。例えば読解コースでは、各読解文に用意されたツールを利用して、語彙リストの作成、読解スピードの計測、文の修飾関係や主述関係の確認などができる。また、内容理解、文法知識についての問題があり、学習者は各自の理解力を確認することができる。コンテンツは以下のとおりである。

＜読解コース＞

全30ユニット構成。「本文」「内容理解」「クイズ」「読む練習」「まとめ」の5項目が各ユニットで提示される。「本文」では読むスピードを把握し、「内容理解」で注釈、ルビなどを使って本文を理解する。「クイズ」は内容把握問題と文法問題が提示される。「読む練習」では主述関係、修飾関係、キーワードなどが提示され、読解力向上のためのヒントを与え、さらにスピードリーディング機能を使って読む速度を速める練習も行える。「まとめ」では、英語、中国語の訳文、注釈機能、音声による文章の確認などができる。

4級(7ユニット)　タイトル例；　しょうたいじょう　　にほんれっとう

3級(7ユニット)　タイトル例；　イルカと超音波　　ごみと景気

2級(8ユニット)　タイトル例；　世界最初の時計　　風呂場の声

1級(8ユニット)　タイトル例；　カルチャーショック　　「さ」と「す」の音のイメージ

＜聴解コース＞

読解と同じく30ユニットで構成される。「本文」「内容理解」「クイズ」「聞きの練習」「まとめ」の5項目が各ユニットで提示される。「本文」はパートごとに区切られ、聞き取れる部分と聞き取れない部分を区別する。「内容理解では」英語、中国語訳、注釈機能を使って聞き取れなかった部分を理解する。「クイズ」で自分の聞きとった内容の理解度を測り、「聞きの練習」ではスピードを変えて聴解能力を高める。最後に「まとめ」で内容の再確認を行う。

4級（7ユニット）　タイトル例；　これ、なんですか　こんどアメリカへいきます

3級（7ユニット）　タイトル例；　スパゲッティにしようかな　きっぷはありますか

2級（8ユニット）　タイトル例；　乗車券を拝見します　明日の朝、東京へ帰ります

1級（8ユニット）　タイトル例；　木のドクター　青山で会いましょう

＜語彙コース＞

生活、勉学・研究、政治・経済、文化・娯楽、科学・技術の5分野、30カテゴリー、300ユニットで構成される。英語あるいは中国語を選択して、「ワードマッチ」（日本語と外国語との対訳探し）、「カナマッチ」（漢字表記ではなくカナ表記のことばのワードマッチ）、「サウンドマッチ」（音声を聞きとって対訳を探す）、「スペルアウト」（ひらがなでタイピング）等の機能を使って学習する。語彙リストを一覧表示することもできる。

＜能力試験ミニテスト＞

日本語能力試験1級から4級まで各級3ユニット、合計12ユニットの演習問題で構成されている。各ユニットは「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」の各項目があり、全部あるいは各項目ごとに選択して能力試験に挑戦する。テスト結果が最後に表示され、弱点部分は再挑戦することもできる。

3. オンライン教材を使用した日本語教育の可能性

3.1 総合的学習支援システムの中のオンライン教材

梶田（2004）は e-Learning が教員の教育活動と学生の学習活動の両者を支援する機能について述べ、大学の講義と講義時間外の学生の学習を総合的に支援するコース管理システム（CMS）の有効性を指摘している。CMSとは「高等教育機関における一学期分の講義など、ひとまとまりの教育プロセス（＝コース）において、講義時間だけでなく、課題時間での教育・学習活動も含め、トータルに支援することにより、教育効果および学習効果を最大にするためのシステム」（梶田 2004）と定義されている。オンライン教材はこのようなシステムの一部である。折本（2005）が述べたように、学生に対してオンライン教材の利用を単に自習用として奨励するだけではそれほど効果はあがらないであろう。日本語教育においても総合的な教育活動の一環としてネットアカデミーを取り込み、総合的に学習支援をしていくべきである。

3.2 日本語クラスでのネットアカデミーの活用

2005 年度前期に国際交流センターでは、大きく分けて大学院入学前予備教育集中コースとレギュラーコースの2コースが開講される。レギュラーコースでは入門(週3回6コマ)、初級後半(週5コマ)で文法を含めた総合的能力習得を目指すクラス、中級以上はスキル別にそれぞれ週5～6コマのクラスが行なわれる。岩手大学国際交流センターでは情報メディアセンターの協力を得て、ネットアカデミー日本語コースを2005年4月から導入するが、以下にネットアカデミーの活用案について述べる。

(1)授業過程に取り込んだ利用

初級では語彙編、聴解編の活用が主たるものとなる。初級前半の学習は課が進むごとに新出文型・語彙が積み上げられていくが、授業だけでは学習項目をらせん状に配列して学習を進める余裕がない。そこで、ネットアカデミーの語彙編、聴解編を課題として与え、学習の進捗状況を実感させる。学習項目が学習者の知識、技能として定着するためには項目の統合化、再分類化のステップが重要である。ネットアカデミーの授業過程での取り込みにより初級段階から、文型、語彙といった言語形式の知識をスキルと結びつけた形で統合化あるいは再分類化の機会を与えることが可能ではないだろうか。さらに授業において会話、作文などの発信力を高める総合的な活動を取り入れることによって、知識と技能を統合した能力開発が期待できる(図参照)。

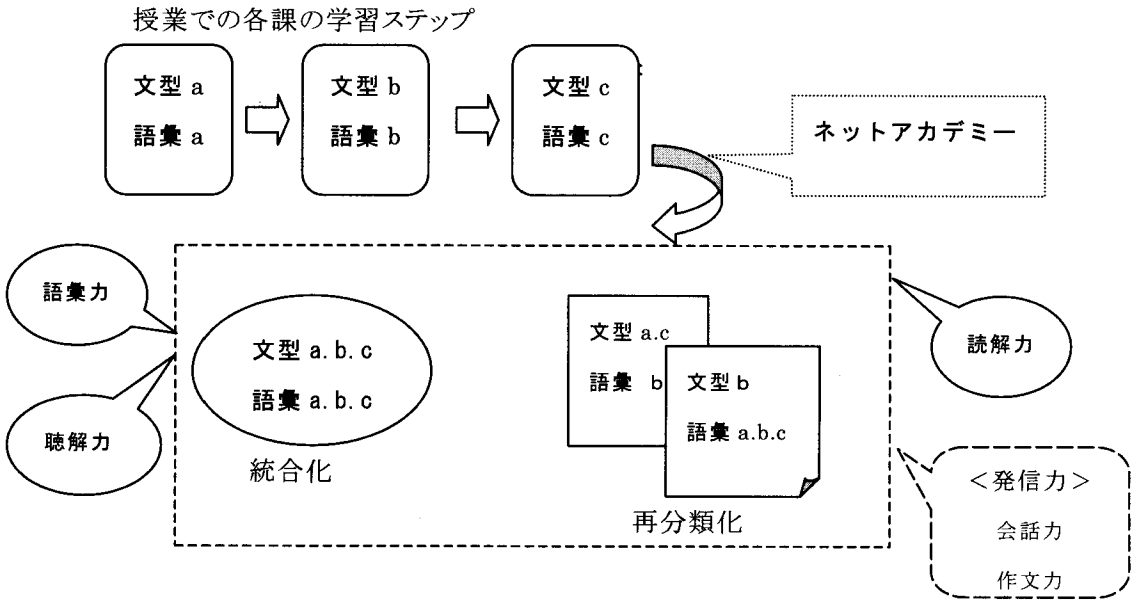


図 ネットアカデミー利用による初級教育課程

たとえば、教科書が半分程度終わった段階から聴解コースを使って文字にたよらない聴解練習を取り入れる。その際に重要なことはスピードである。ネットアカデミーでは聴解文のスピード設定が可能なので、教師が学習者の能力に応じて細かく速度を指定し、練習を繰り返す。文字を見ずに

音だけで外国語を理解するためには、トレーニングの積み重ねが有効である。授業外での学習者個々の聴解トレーニングはこれまで学習者の自主性に任せてきたが、ネットアカデミーを活用して利用状況を管理しながら学習者へのフィードバックを行い、学習到達度を確認し、達成感を味わわせることで学習への動機づけをさらに高めることができる。

語彙コースも同様に分野別に語彙を整理する作業を授業過程の後半から取り入れる。初級段階の学習では文型機能と関連性の深い語彙が各課で提示されることが多いが、教科書の提示順とは離れた分野別の視点から整理することによって、語彙の記憶、理解の定着度が高まる。

中級以上では、スキル別の授業編成になり、それぞれのスキルを高めるのに必要なものを学習過程に取り入れていくことになる。語彙コースは、どのスキルにも必要なものである。授業で取り上げたトピックに近接した課を課題として各自に取り組ませ、たとえば、会話授業なら、課題を出した次の授業の際、ネットアカデミーで学習した語彙を使用したディスカッションを行ったり、ディクテーションテストを行ったりして確認作業を行う。このことで、学習者はネットアカデミーでの取り組みと授業との関連が明確に把握でき、課題にも積極的に取り組まざるを得なくなるだろう。さらに、聴解スピードが上がっているかどうか、授業中に時折聞きとり問題に取り組ませてネットアカデミーの効果を実感させることも重要である。読解コースも同様に、読解スピードを意識させるためにスピードリーディングの課題を授業に取り入れ、ネットアカデミーでのトレーニングと授業での進捗状況の確認をリンクさせることができる。作文でも聴解、読解、語彙の各コースで取り上げた項目を利用して作文課題を与え、日本語によるアウトプット能力を高めることにつなげることもできる。

(2) 自習支援利用

中級以上ではまず、能力試験ミニテストコースで個々の能力を把握、認識することから始まる。そして、各自の弱点克服を目指して読解、聴解、語彙の各編の活用を教師の指示の下で使用する。岩手大学の特に大学院レベルの留学生に「自分の日本語能力を客観的に測りたい」「日本語能力を客観的に証明したい」という意見が目立つ。しかし、多忙な学生生活の中から日本語学習に割ける時間は限られている。学生が日本語能力を全般的に高めることを希望する場合には、自習支援という方法が現実的である。自習に対して、教師が個々に支援を行うことは時間的に困難であるが、チューターが対応することは可能である。教師はネットアカデミーのコンテンツに対応したチェックリストやチェック課題を準備し、それを学生がチューターと利用することによって個々のペースで能力を高めることができる。ただし、無制限に学習進捗度の自由度をあげると学習が進まなくなるので、教師が助言し、ある一定期間で到達度をチェックすることが必要であろう。チューターと学習者に任せたままの自習ではなく、枠を設定することが教師の役割として不可欠である。『アルクネットアカデミーユーザーズガイド　日本語コース-受講者編-』には学習プランの3つの参考例が示されているが、いずれも3ヶ月程度の短期間で取り組むことによって効果が上がると述べている。授業である程度の知識、技能を習得させ、コースの後半部分でネットアカデミーを取り入れた自立学習を取り入れるのが効果的だろう。

4. まとめと今後の課題

学習者のレベルに関わらず、既習事項の単純な繰り返しは学習者にとって苦痛であり、学習効果もさほど期待できないが、ネットアカデミーのコンテンツは授業で使用する教材とは異なり、コンテンツに対する学習者の興味を喚起できること、また学習者個々のニーズ(スピード、難易度、分野など)に合わせて利用できることから、学習定着度を高める効果が期待できる。

授業過程の一環として、自習支援用として多用な活用法が考えられるが、いずれの利用法の場合にも重要なことは、教師が学習者に対して受講している教育課程の全体像を総合的に提示し、教育課程のそれぞれの位置付け、現在の進度、到達目標、各自の到達度などについて情報を提供し、それに対応した学習を奨励しつづけることである。今年度はいくつかの教育課程においてネットアカデミーの利用方法を模索し、オンライン教材を取り込んだ教育課程における教師の関わり方、役割について実践研究を続けたい。

＜参考資料＞

梶田将司(2004)「高等教育機関における情報基盤としてのコース管理システム」
http://www.itrc.net/report/sympo2004/data/sympo2004_kajita.pdf

折本　素(2005)「英語教育とe-Learning」 ALC NetAcademy 通信 10

(株)アルク・日立ソフトウェアエンジニアリング(株) (2005)『ネットアカデミー　ユーザーズガイド
日本語コース-受講者編-』

---

i 筆者は読解コースの作成作業(コンテンツ作成)の一部に関わった。

ii (財)日本国際教育協会主催の日本語能力判定試験。外国語としての日本語能力を証明するものとして全世界で活用されている。なお、大学入学のための日本語能力判定としては日本留学試験がある。

日本語特別コースおよび国際交流科目日本語科目実施報告

1. 国際交流科目日本語科目のスタートと日本語特別コースとの関係

国際交流センターでは日本語特別コースとして、全学の外国人留学生、研究員、家族等を対象に、入門期から上級まで5レベルの日本語教育を提供している。日本語特別コースの各授業は岩手大学に在籍する学生、研究員、教員やその家族は受講できるが、単位認定はしていない。

一方、岩手大学国際交流センターでは平成 16 年度から短期留学特別プログラム制度を立ち上げ、同プログラムのために国際交流科目として日本語科目も提供されることになった。本来なら、国際交流科目として授業を新設すべきであるが、受講者数が限られていること、当センターの人的、経済的制限があることから、日本語特別コースの初・中級レベルの授業を国際交流科目と兼ねて開講することになった。すなわち、日本語特別コースは初・中級クラスは国際交流科目日本語科目、上級クラスは全学共通教育日本語科目と兼ねて授業が行われているということである。

2. コース概要

2.1 開講クラス

本コースは、初学者対象の「初級Ⅰ」、初級前半終了者対象の「初級Ⅱ」、初級終了者対象の「中級Ⅰ」、中級前半終了者対象の「中級Ⅱ」、そして「上級」の5つのレベルがあり、受講者はプレースメントテストの結果によって各自の能力やニーズに応じたレベルの授業を受講する。授業は1学期 15 週間実施され、1 学期受講すると次学期は一つ上のレベルにステップアップするようカリキュラムを構成している。なお、上級に限り、全学共通教育外国語科目としての上級日本語との並行開講であるため、通年受講で終了するようにカリキュラムが構成されているが、前期、後期いずれから受講を始めても問題がないように配慮している。なお、このほかに、全学共通教育の日本事情(文系・理系)も履修が可能である。授業概要は以下のとおりである。

初級Ⅰ　－Beginner－

科目名	内容	定員
初級Ⅰ総合	初めて日本語を勉強する人が対象です。初歩的な文法について勉強し、日本での生活に必要ないろいろな場面での会話ができるようにします。 テキスト:『みんなの日本語初級Ⅰ』(スリーエーネットワーク)ほか	10
初級Ⅰ表記	初めて漢字を勉強する人が対象です。およそ 200 字程度の基礎的な漢字の読み書きの練習と、基本文型を使った作文の練習をします。 テキスト:『Basic Kanji Book Vol.1』(凡人社)ほか	10

初級Ⅱ　－Elementary high－

科目名	内容	定員
初級Ⅱ総合	日本語を 150 時間程度学習した人が対象です。初級後半レベルの文法を勉強し、日常生活に役立つ会話ができるようにします。簡単な読み書きも勉強します。 テキスト:『みんなの日本語Ⅱ』(スリーエーネットワーク)	10
初級Ⅱ漢字	初級漢字 150 字～200 字程度学習した人が対象です。およそ 300 字程度の基礎的な漢字の読み書きを練習します。 テキスト:『Basic Kanji Book Vol.2』(凡人社)	10

中級Ⅰ　－Intermediate low－

科目名	内容	定員
中級Ⅰ総合	初級の学習が終わった学習者初級修了者が対象。終了者が対象。 初級で学習した文法を復習しながら中級レベルの文法を学習し、総合的な日本語力を高めます。 テキスト:『現代日本語コース中級Ⅰ』(名古屋大学出版会)	15
中級Ⅰ読解	毎日の生活に必要な基礎的な書きことばを学習し、簡単な文章を読んで理解できるようにします。　テキスト:『大学・大学院留学の日本語1-読解編-』(アルク)	15
中級Ⅰ会話	身近な話題についての話を聞き取り、自分の持っている情報や意見を伝えることができるようにします。　テキスト:『なめらか日本語会話』(アルク)	15
中級Ⅰ作文	初級後半から中級前半レベルの文法項目を使い、日常生活で使う、手紙、メモなどが書けるようにします。テキスト:『大学・大学院留学の日本語2-作文編-』(アルク)	15
中級Ⅰ漢字	初級漢字 500 字程度の学習をした人が対象です。800～1000 字程度の漢字の読み書きを練習します。テキスト: :『Intermediate Kanji Book Vol.1』(凡人社)	15

中級Ⅱ　－Intermediate high－

科目名	内容	定員
中級Ⅱ総合	初級の学習が終わった学習者が中級から上級へレベルアップするために必要な機能、文法などを学習します。テキスト:『現代日本語コース中級Ⅱ』(名古屋大学出版会)	15
中級Ⅱ読解	日本語で書かれた専門的な文章、論文などを読むための基礎的な表現、構成について学習します。　(授業で指示します)	15
中級Ⅱ作文	中級で学習する文法項目を使って、大学で学習するために必要な文章力を高めます。 テキスト:ハンドアウト	15
文系日本語	文系の専門日本語の基礎について学習します。　テキスト:(授業で指示します)	15
理系日本語	理系の専門日本語の基礎について学習します。　テキスト:ハンドアウト	15
上級会話	大学生活に必要なアカデミックな口頭表現を学びます。　テキスト:ハンドアウト	15
上級読解	研究に必要な文献を読むための力を養成します。　テキスト:ハンドアウト	15
上級作文	大学生活に必要なアカデミックな作文技術を学びます。　テキスト:授業で指定します	15

2.2 オリエンテーション

受講希望者には、学期始めに実施されるオリエンテーションへの参加が義務付けられている。ここでは、コースの履修方法、各授業の概要説明の後、プレースメントテストが行なわれる。平成16年度は以下のようにオリエンテーションを実施した。

＜前期＞ 4月2日(金) 14:30-16:00 学生センターG45 参加者20名
4月8日(木) 13:00-14:30 学生センターG4B 参加者5名
＜後期＞10月5日(木) 13:30-14:30 学生センターG45 参加者25名
10月8日(金) 13:30-14:30 学生センターG4B 参加者17名

なお、諸事情で参加できない学生に対しては担当教員が個別に対応した。オリエンテーションでは、日本語特別コースの受講方法、手続きの手順、授業内容，教科書、時間割、履修上の注意事項などが説明され、受講希望者の質問に応じた。オリエンテーション時に受講希望者は、氏名、出身、所属、日本語学習歴などを記入した「受講申請書」を提出した。また、研究生、大学院生には、指導教官からの「受講承諾書」の提出を求めた。

オリエンテーション後半はプレースメントテストを実施した。なお、前学期に日本語特別コースを受講し、受講修了書を受け取った学生はプレースメントテストを免除した。結果は翌日国際交流センター掲示板に掲示し、学生の履修相談を受け付け、履修科目を決定した。

3. 平成16年度実施状況

開講科目、時間、担当者、受講者数は以下のとおりである。

＜前期＞ (4月12日～8月2日) 特別コースのみ(上級は全学共通教育を兼ねる)

科目名	時　間	担　当	受講数
初級Ⅰサバイバル	火・水・金　1－4	松岡洋子・小野寺淑・大高久枝	8
初級Ⅱ総合	水・金　1－4	大高久枝・大畑佳代子	3
初級Ⅱ漢字	月・金　5	小笠原洋光	4
中級Ⅰ総合	月・木　3・4	尾中夏美・松岡洋子	8
中級Ⅰ会話	月　3・4	尾中夏美	5
中級Ⅰ作文	火　5・6	中村ちどり	4
中級Ⅰ読解	水　7・8	橋本学(人文社会科学部)	3
中級Ⅰ漢字	月7　木2	尾中夏美	5
中級Ⅱ総合	月・水　5・6	松岡洋子	10
中級Ⅱ読解	水　7．8	岡崎正道	3

科目名	時　間	担　当	受講数
中級Ⅱ作文	木　5・6	中村ちどり	4
理系日本語	木　7－10	小笠原洋光	2
文系日本語	月　3・4	岡崎正道	10
上級会話	月　7・8	松岡洋子	6(+14)
上級読解	水　9・10	岡崎正道	7(+10)
上級作文	金　3・4	菊地　悟	6(+6)
日本事情(理系)	火　3・4	岡崎正道	6(+12)
日本事情(文系)	水　1・2	小笠原洋光	(+2)
コマ数計	29		100(+44)

( )内は全学共通教育受講者数

＜後期＞（10 月 12 日～2 月 22 日）

＊初・中級は国際交流科目日本語科目、上級は全学共通教育を兼ねる。

＊初級Ⅱおよび中級Ⅰの一部はアーラム大学 SICE プログラムの学生が 11 月まで参加した。

＊初級Ⅱには外務省青年招聘事業研修生が 12 月、1月に参加した。

科目名	時　間	担　当	受講数		
			特別	国際	共通
初級Ⅰ総合	水・金　1－4	松岡洋子・大高久枝	12	0	－
初級Ⅰ表記	火・金　5・6	山屋頼子	9	1	－
初級Ⅱ総合	水・木　1－4	大高久枝・大畑佳代子	12	1	－
初級Ⅱ漢字	月　5・6	小笠原洋光	6	0	－
中級Ⅰ総合	月・水　5・6	尾中夏美・松岡洋子	15	1	－
中級Ⅰ会話	月　3・4	尾中夏美	16	0	－
中級Ⅰ作文	火　5・6	中村ちどり	8	1	－
中級Ⅰ読解	水　7・8	橋本学（人文社会科学部）	11	1	－
中級Ⅰ漢字	月　7・8	尾中夏美	8	2	－
中級Ⅱ総合	火1・2　木3・4	松岡洋子	9	3	－
中級Ⅱ読解	金　7．8	岡崎正道	4	4	－
中級Ⅱ作文	木　5・6	中村ちどり	3	1	－
理系日本語	木　7－10	小笠原洋光	5	0	－
文系日本語	月　3・4	岡崎正道	7	2	－
上級会話	月　7・8	松岡洋子	5	－	14
上級読解	水　9・10	岡崎正道	9	－	15

科目名	時　間	担　当	受講数		
			特別	国際	共通
上級作文	金　3・4	大野眞男	0	－	7
日本事情(文系)	火　3・4	岡崎正道	6	－	12
日本事情(理系)	水　1・2	小笠原洋光	0	－	0
コマ数計	29		145	17	48

4. 問題点、課題

4.1 施設、設備

①教室の確保が困難である。学生センターで実施される授業が多いため、特に日本語クラスに適当な演習室規模の教室が絶対的に不足している。担当教員が学期始めに教務係と教室の調整を行なうが、全学共通教育と同様、事務正規に対応してほしい。

②夏期には教室の環境が劣悪になる。特に午後は暑すぎ、学生が熱射病に罹る危険性がある。経費節減のため冷房設備のある教室は岩手大学には非常に少ないが、異常気象の続く近年の状況を見ると、これまでとは異なる視点で学習環境を整備する必要がある。

4.2 内容、コースの位置付け

学習者の日本語レベル、ニーズが多様であるが、それぞれの絶対数が少ないために効果的なクラスの設置が困難である。そのため、日本語特別コースの各科目を複数のプログラムと兼用で運営している。今年度は、交流協定校のアーラム大学 SICE プログラム日本語科目、外務省青年招聘事業専門研修に利用した。来年度以降も、日韓共同理工系学部留学プログラム、研修コース、日本語・日本文化研修生、短期留学生等、国際交流科目としての受講者等、多様な学生が受講するクラスを兼ねる。複数のプログラムを合同の授業として実施する利点もあるが、プログラム開始時期のズレや、対象学生による内容の整合性など考慮しなければならない課題も多い。今後、プログラムごとに課題を明確にし、具体的な検討を進めていく必要がある。

以上

(文責:松岡洋子)

(参考資料)　授業概要メモ(一部)

日本語特別コース科目　理系日本語Ⅰ

(1)前期(木曜日　5－6校時)

受講生　:工学部生1名

授業内容:高等学校教科書　物理学Ⅱ、数学Ⅱ,Ⅲ(微分,積分)、数学C(行列と行列式)

授業形態:ホームワーク

(2)後期(木曜日　5－6校時)

受講生　:農学及び工学研究科生各1名、工学研究員1名・・・計3名

授業内容:資料(参考資料)に基づき、物理学、化学、生物学の各分野における表記法;物理量、化学式、細胞レベルの表記、物質・物体の状態表現、電気・電子回路と回路素子、比較、対比、類似、因果関係、論文の形式、科学史(自然科学および数学)、少し古い時代の日本語の表記(旧仮名遣い)の例示。

授業形態:読解、漢字習得、文や用語内容の説明のための講義

日本語特別コース科目　理系日本語Ⅱ

(1)前期(木曜日　7－8校時)

受講生　:工学部工学研究科博士前期生1名

授業内容:射影幾何学(日本語教科書)読解

授業形態:読解、漢字習得、及び数学的内容把握(定式化の考え方と演算法)

(2)後期(木曜日　7－8校時;1月以降は試験と研究のため、授業は行わない)

受講生　:工学部工学研究科博士前期生1名

授業内容:自然現象の数学的解析法に関連する日本語の論文(波紋の格子モデル、砂丘模型の基本アルゴリズム)読解

授業形態:読解、漢字習得、及び数学的内容把握(定式化の考え方と演算法)のための解説

参考資料

1. 山崎信寿、富田豊、平林義彰、羽田野洋子　共著
『科学技術日本語案内』(慶応義塾大学出版会)
2. 科学技術和英表現辞典刊行会編
『科学技術論文,報告書その他の文書に必要な英語文型・文例辞典』(小倉書店)
3. 木村陽二郎　著『自然科学概論』(裳華房)
4. H,G.Wells　著　北川三郎　訳『世界文化史体系』(大鐙閣)
5. 吉田洋一　著『零の発見』岩波新書 49(岩波書店)

(担当:小笠原洋光)

初級漢字Ⅱ

(1)前期(月曜日及び金曜日　5－6 校時)

受講生　:メキシコ　1名、中国　2名.

テキスト:BASIC　KANJI　BOOK　VOL.2　基本漢字 500(凡人社).

授業内容:第 23 課から第 36 課まで、教科書で扱う漢字を基に、教科書以外の熟語例と例文及び、日本語の実際を知ってもらうために白洲正子著「日本のたくみ」(新潮文庫)の中から、[扇はあそび]、[ハシの文化]の2題.

(2)後期(月曜日　5－6 校時)

受講生　:メキシコ　1名、　中国　2名、　韓国　2名、　アルメニア　1名.

テキスト:BASIC　KANJI　BOOK　VOL.2　基本漢字 500(凡人社).

授業内容:第 23 課から第 29 課まで、以下前期と同じ.

(担当:小笠原洋光)

日本語研修コース実施概要

1. コースの目的

日本語研修コースは、大学院入学前の日本語予備教育プログラムであり、6ヶ月間の日本語集中コースとして開講されている。受講対象となる学生は、岩手大学と近隣の大学の大学院へ進学する予定の留学生(大使館推薦の国費研究留学生および教員研修留学生)であるが、国際交流センターの許可を得た場合は他の留学生も受講することができる。毎年 4 月と 10 月に開講され、日常生活と研究に必要な日本語の基礎を学ぶ。

2. 平成 16 年度前期

(1) 受講生

受講生は 2 名で、内訳は大使館推薦国費研究留学生(ブラジル人男性、修了後は工学部配属予定)1 名、私費研究留学生 1 名(中国人男性、人文社会科学部配属)である。

(2) 授業日程

4 月 12 日	開講式とガイダンス
4 月 13 日	授業開始
4 月 29 日～5 月 5 日	連休
7 月 23 日	修了発表会
8 月初旬～下旬	夏休み
8 月下旬～9 月中旬	補習授業
9 月 21 日	修了式

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
I (9:00～10:30)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
II (10:30～12:00)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
III (13:00～14:30)	漢字	漢字	コンピュータ	漢字	漢字
IV (14:45～16:15)		日本事情	個別指導		

※ 漢字クラスは 13:45～14:00 の間は自習時間

※ 日本語授業のレベルは、全て初級II

(4) 授業担当者

総合日本語: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

読解・作文:　中村ちどり(国際交流センター専任教員)
漢字:　松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)
コンピュータ:　小笠原洋光(国際交流センター専任教員)
日本事情:　尾中夏美(国際交流センター専任教員)
個別指導:　中村ちどり(国際交流センター専任教員)

3. 平成16年度後期

(1) 受講生

受講生は4名で、内訳は大使館推薦国費研究留学生(ガテマラ人男性、修了後は工学部配属予定)1名、教員研修留学生3名である。教員研修留学生3名の内訳は、岩手大学配属予定者が1名(ブラジル人女性)、秋田大学配属予定者が2名(フィリピン人女性、オマーン人男性)である。

(2) 授業日程

10月13日	授業開始
10月15日	開講式とガイダンス
12月24日～1月9日	冬休み
1月5日～7日	スキー研修旅行
2月17日	日本語修了発表会
2月下旬～3月中旬	補習授業
3月14日	修了式
3月16日	留学生送別会

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
Ⅰ(9:00～10:30)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
Ⅱ(10:30～12:00)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
Ⅲ(13:00～14:30)	漢字	漢字	コンピュータ	漢字	漢字
Ⅳ(14:45～16:15)		日本事情	個別指導		

※ 漢字クラスは13:45～14:00の間は自習時間
※ 日本語授業のレベルは、全て初級Ⅰ

(4) 授業担当者

総合日本語:　松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)
読解・作文:　中村ちどり(国際交流センター専任教員)

漢字:　　松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

コンピュータ:　　小笠原洋光(国際交流センター専任教員)

日本事情:　　尾中夏美(国際交流センター専任教員)

個別指導:　　中村ちどり(国際交流センター専任教員)

(担当:中村ちどり)

全学共通科目(日本語)

センター設立以前は、フランス語・ドイツ語など他の言語と同様の「初修」外国語と位置づけられ、日本語能力試験1級レベル(でなければ、そもそも入試で合格できない)の外国人留学生(各学部の1年生)に対し、建前としては初級(イロハ)の日本語を必修受講させるという、まことに不合理にして奇妙きてれつな慣習が長年続いてきていたが、センターの発足に伴いこの不可思議な慣習を撤廃し、入学時点で既に相当レベルの日本語能力を有している1年次の留学生の実情に適合した「上級日本語」を選択で履修させる、合理的な規則に改変した。

「上級日本語」の授業は週3回設けられ、会話(口頭表現技能)・作文(論文作成)・読解の指導が3人の教員によって行なわれている。受講者は単位取得希望の留学生のほか、高度な日本語力を磨きたいと望む学生やその家族も参加し、「日本語特別コース」の上級編も兼ねる授業となっている。

「読解」の具体的な内容としては、次のようなものを多く取り上げている。

(1) 日本の歴史と文化

(2) 現代日本の政治と経済

(3) 日本の諸習慣と日本人の意識

(4) 日本および世界の最近の出来事

文責(岡崎正道)

全学共通教育科目(日本事情)

この科目は全学共通教育科目「人間と文化」の一つとして留学生を対象に、理系と文系の2コースに分かれて開講されているものである。資料及び取扱内容は前年度とほぼ同様であるので、簡潔にのべるに留める。

1. 理系

科学技術導入の歴史と日本の大学制度の変遷を、社会の要請と科学の進展を背景において調べ、法人化を選択した日本の大学が今進めている産学官協力に目を向け、科学教育がもたらす社会・文化への影響を考える。

1.1 受講生

本年度前期は1名、後期は6名で、何れも工学部生である。

1.2 授業および評価

以下の項目でについて、輪読しながら講義・解説及び議論を行った。

1) この講義の目的を説明と主題の基礎資料である『科学の社会史』前書きの読解。
2) 序章「社会のなかの科学」読解、解説。
3) 第1章「日本における近代科学の基礎工事」読解、解説、討議。
4) 1750年頃からの大学、諸研究機関設置とその変遷。年表解説。
5) 韮山反射炉の話と輻射の話。
6) 工作機械と鉄鋼業
7) 技術者養成機関としての大学
8) 国産エンジンの話
9) 日本の鉄道と新幹線輸出
10)電子顕微鏡の歴史とコンピュータを駆使した現在の電子顕微鏡の話題
11)京都大学における産学連携
12)東京大学における産学連携

評価は、出席して輪読に参加すること及びこの授業の意図を踏まえた自由課題のレポートで行った。レポートのテーマを以下に記す。

① 韓国の高速鉄道(KTX)
② 日本の産業
③ 私の興味—ロボットについて

④ 日本の産業—工業と製品の輸出

⑤ 戦後の日本自動車産業の発展

⑥ 国立大学の法人化をめぐって

⑦ 日本のこれからと中国のこれから

前期は問題なかったが、後期の出席状況は思わしくなく、またレポートもインターネットで他人の HP をそのままコピーして提出する学生が多く、個別指導を必要とした。また、授業に対して「工学部生にはこのような文系の授業は必要でないから力を入れることはないのではないか」と言って、授業に出なかったり遅刻することの理由付けをする学生も現れた。これらの学生に対しては、個別に研究室に呼出して、4日間の補修学習を行い、科学の社会史における役割についての考え方を解説した。さらに、理系の学生に対し日本の大学で人文科学に関する科目修得を課する理由を説明し、併せて、人文科学の考え方とそこで用いる資料の意味についての解説も行い、カリキュラムについての理解を促した。

上述のように、留学生にとって授業の目的が自明でないこのことは、これからの留学生教育を進めて行く上で大変参考になった。

[参考資料] 授業で用いた資料(前年度使用を含む)のリストを以下に記載する。

単 行 本： 廣重 徹　著『科学の社会史』(岩波書店)

国立天文台 編『理科年表』2002 年 (丸善)

山口幸夫　著『20 世紀の理科年表』(岩波書店)

伊藤正昭　著『地域産業論』(学文社)

前田清志　編『技術史教育論』(玉川大学出版会)

新庄浩二　編『産業組織論』(有斐閣)

馬渕 幸一　著『日本の近代技術はこうして生まれた』(玉川大学出版会)

梅棹忠夫　著『近代世界における日本文明』(中央公論社)

菅野礼司 他著『東の科学西の科学』(東方出版)

新聞記事： 日刊工業新聞、 日本工業新聞、 朝日新聞、 読売新聞、 岩手日報

学 会 誌： 権上かおる「東京大学創立 120 周年記念—東京大学展—」(金属 vol.68(1998)90)

(理系担当:小笠原洋光)

2. 文系

外国人留学生が日本で学び、また日常生活を営む上で必要となる日本に関する諸事情、諸文化事情について講義する。具体的内容を以下に記す。

1) 日本人の言語表現の特質

2) 日本人の精神と日本文化の特性

3) 日本の歴史と思想

4) 政治・経済・社会・風俗等、現代日本の諸問題

5) その他、日本および日本人に関するあらゆる事柄

（文系担当：岡崎正道）

日本語・日本文化研修コース

1. コースの特色

本コースのねらいとするところは、日本語および日本の諸事情、すなわち日本の文化・歴史・地理・政治・経済・社会・教育等々について、理解を深めさせることにある。教室内の学習にとどまらず、様々な体験学習等がふんだんに用意され、楽しみながら学べるのが本学の特色である。

2. 受講生

2002～03年はロシア人1名、2003～04年はロシア・チェコ・中国各1名の計3名を受け入れた。2004～05年は中国・カザフスタン各1名を受け入れている。

3. 指導体制

留学生の専門分野や興味・関心にマッチする専攻の教員が、指導教官を務める。また日本語指導や生活・就学上の相談等については、国際交流センターの教員が共同で携わった。

4. 活動内容

周辺の名所・旧跡等を訪ねたり、必要に応じ博物館等の文化施設で研修を行なう。学内・学外のイベント等に積極的に参加して、関係者や市民との交流を深める。花見・バスツアー・キャンプ・盆踊り・七夕・クリスマス・餅つき・スキーツアー・ひな祭り等々、季節ごとの催しが大学および学外諸団体によって数多く実施され、留学生はこれらを通して日本文化を実体験することができる。

5. 受講資格・修了要件

このコースを受講することができる学生は、中級レベル以上の日本語力を有し、日本語・日本文化に関する分野を専攻もしくは学習している者である。コースの修了者には修了証を交付、また受講科目については、成績等の条件を満たした場合単位を与える。

文責：岡崎正道

日本語研修コース、日本語・日本文化研修コース修了発表会

国際交流センターでは、日本語研修コースと日本語・日本文化研修コースの学生を対象としたスピーチ発表会を毎学期行っている。前期は日本語研修コース(1学期間)と日本語・日本文化研修コース(1 年間)の修了発表として行われる。後期は日本語研修コース(1 学期間)の修了発表として行われている。

1. 平成16年度前期

(1) 日時・参加者

平成16年7月23日　学生センター棟3階会議室

約50名参加(外国人留学生、教員、日本人学生、地域の外国人、留学生支援団体の方々等)

(2) 発表内容

(日本語研修コース修了生)

①マルセーロ・マエス(ブラジル)　『私が生まれた町、クリチーバ』

②楊　彦君(中国)　『中華料理について』

(日本語・日本文化研修生)

③ペトラ・ヴァーツラヴィーコヴァー(チェコ)　『保元・平治・平家物語における平清盛像』

④徐　慶雲(中国)　『生活日本語の中の複合語』

⑤ソフィア・ダンシナ(ロシア)　『ロシアと日本の少年犯罪』

2. 平成16年度後期

(1) 日時・参加者

平成17年2月17日　学生センター棟3階会議室

約50名参加(外国人留学生、教員、日本人学生、地域の外国人、留学生支援団体の方々等)

(2) 発表内容

(日本語研修コース修了生)

①セサル・ペレス(グアテマラ)　『火山の国、グアテマラ』

②ロベッサ・ヒラリオ(フィリピン)　『東洋の真珠　フィリピン』

③アリーネ・アントウネス(ブラジル)　『ようこそブラジルへ』

④アブドゥラ・アル・アブリ(オマーン)　『オマーンの過去と現在』

(担当:中村ちどり)

夏期休暇中および春期休暇中日本語補講報告

1. 夏期休暇中日本語補講

①初級Ⅱ予備クラス

日時: 2004年9月2日～9月30日 9:00－12:00 (全8回)

対象: 初級Ⅰ修了者、アーラム大学SICEプログラム(参加者 計8名)

担当: 大高久枝　大畑佳代子

内容: 初級レベルの総復習。初級の基本文型を使って四技能を総合的に高める。

利用教材 『げんき1』(The Japan Times)

『みんなの日本語Ⅰ』(スリーエーネットワー) ほか

②中級Ⅰ予備クラス

日時:2004年9月1日～9月29日 13:00－16:30 (全8回)

対象:初級Ⅱ修了者、研修コース修了者、アーラム大学SICEプログラム(参加者 計7名)

担当: 山屋頼子　大高久枝

2. 春期休暇中日本語補講

日時: 2005年3月1日～3日 (全3回)

対象: 初級Ⅰ修了者 (参加者 計5名)

担当: 大高久枝　山屋頼子　坂本淳子

内容: 初級Ⅰレベルの基本文型を使った読解、作文、会話力の向上

利用教材 『みんなの日本語Ⅰ』(スリーエーネットワーク)

『わくわく日本語リスニング』(凡人社) ほか

3. 課題

・初級前半終了を復習するための教材が不足している。受講者のニーズに合わせて教材開発が必要である。

・アーラム大学の学生の学習スタイルが岩手大学の授業と異なるため、授業に参加するときに戸惑いがあるようだ。日本語だけで授業をすすめるスタイルに慣れさせるため、授業の進め方についてのオリエンテーションが必要である。

以上

(文責:松岡洋子)

平成16年度外務省長期青年招聘事業研修報告

1. 受け入れの経緯

平成16年度に岩手大学国際交流センターは外務省が実施する青年招聘事業の受け入れ機関として専門研修(日本語・日本語教育)を実施した。この事業は外務省が毎年実施する途上国の人材育成事業のひとつで、約3ヶ月の日本語研修および文化体験と2ヶ月半の専門研修を行う。岩手大学国際交流センターでは専門教育実施機関としてつぎの研修生を受け入れた。

氏名: マリーナ・ペトロシャン

出身: アルメニア

主たる研修事項: 日本語学習、日本語教授法研修

研修期間: 平成16年11月24日 ～平成17年2月4日

2. 研修の概要

＜日本語学習＞

①岩手大学国際交流センター日本語特別コース受講(週7コマ)

初級Ⅰ表記(火・金)13:00-14:30 (担当:山屋頼子)

初級Ⅱ総合(火・木) 8:40-12:00 (担当:大高久枝・大畑佳代子)

初級Ⅱ漢字(月) 13:00-14:30 (担当:小笠原洋光)

中級Ⅰ会話(月) 10:30-12:00 (担当:尾中夏美)

②日本語個別指導(水) (週1コマ)

読解・作文(水) 10:30-12:00 (担当:小野寺淑)

③チュータリング (週2コマ)

日本語補習(火・金) 16:30-18:00 (担当:人文社会科学部3年次 馬場路子)

＜日本語教授法＞ (週1コマ＋資料収集)

①個別研究 初級教材分析(木) 13:00-14:30 (担当:松岡洋子)

②教授法実習(平成17年1月12日(水) 弘前学院大学文学部)

③資料収集 (平成17年1月14日(金)～15日(土)

・国際交流基金日本語研修センター図書室(さいたま市)

・凡人社(東京都)

＜体験学習＞ (週1コマ＋体験)

①日本事情(火) 14:45-16:15 (担当:尾中夏美)

②もちつき体験(平成17年1月3日) 岩手大学国際交流会館

③スキー合宿(平成17年1月5日～7日) 安比高原スキー場(留学生スキー合宿に参加)

3. 研修スケジュール

月日	日程	月日	日程	月日	日程
11／24	盛岡へ移動	12／18		1／11	個別指導
11／25	特別コース　個別研究	12／19		1／12	教授法実習(弘前)
11／26	個別指導　　歓迎会	12／20	日本語　個別指導	1／13	個別指導
11／27		12／21	日本語　ゼミ	1／14	資料収集旅行(東京)
11／28		12／22	個別指導	1／15	〃
11／29	日本語　個別指導	12／23	祝日(天皇誕生日)	1／16	
11／30	日本語　　日本事情	12／24	個別指導	1／17	日本語　個別指導
12／ 1	個別指導	12／25		1／18	日本語　ゼミ　日本事情
12／ 2	日本語　個別研究	12／26		1／19	個別指導
12／ 3	日本語　個別指導	12／27	個別指導	1／20	日本語　個別研究
12／ 4		12／28	〃	1／21	日本語　個別指導
12／ 5		12／29	冬季休業	1／22	
12／ 6	(千葉)	12／30		1／23	
12／ 7	(千葉)	12／31		1／24	日本語　個別指導
12／ 8	個別指導	1／ 1		1／25	日本語　ゼミ　日本事情
12／ 9	日本語　個別研究	1／ 2		1／26	個別指導
12／10	日本語　個別指導	1／ 3	もちつき体験	1／27	日本語　個別研究
12／11		1／ 4		1／29	日本語　個別指導
12／12		1／ 5	スキー研修	1／30	
12／13	日本語　個別指導	1／ 6	〃	1／31	
12／14	日本語　　日本事情	1／ 7	〃	2／ 1	日本語　個別指導
12／15	個別指導	1／ 8		2／ 2	日本語　ゼミ　日本事情
12／16	日本語　個別研究	1／ 9		2／ 3	送別会
12／17	日本語　個別指導	1／10	祝日(成人の日)	2／ 4	東京へ移動

4. 研修効果

当該研修生は自国でわずかな日本語学習歴があるだけで来日し、約3ヶ月の日本語学習をした後に当センターで専門研修を行った。日本語力は初級修了(日本語能力試験3級合格程度)程度を習得した。また、日本語教育に関しては複数の初級教材分析、教授法実習体験、資料収集などを実施し、最終課題として指定した教材の分析を行った。このような活動の結果、日本語教育におけるシラバス、カリキュラム、教材についての基礎的な知識を得た。

5. 研修生からの反応

岩手大学での2ヶ月半の研修で、日本語の知識が高まったことが一番の研修効果であった。また、授業を受けることを通じて複数の教師の教え方を知り、これまで自らが受けてきた、あるいは教えた方法とは異なる新しい教育方法についての知識が高まった。さらに、弘前学院大学での日本語教授法実習体験では、学習者の視点、教師の視点について具体的に見ることができた。アルメニアでも日本語教育に対するニーズが今後高まる可能性があり、その際には今回の研修で得た知識を活用したい。

日本事情等での文化体験も有意義であり、特に着物の着付け体験は初めてで大変興味深かった。また、スキー体験も初めてであったが、スキーや寒さに対する苦手意識が克服でき、岩手大学の留学生との交流も深まって意義深かった。

6. 課題

①受け入れ形態:

今回の研修生は国際交流センターで通常実施している日本語特別コースに中途時期から受け入れ、個別指導でそれを補完する形で研修を実施した。しかし、学期途中のため授業に参加しにくく、最適の方法とは言えなかった。また、生活支援体制についても事務、チューターと協力し、可能な限りで対応したが、十分とは言えず、また、担当者の負担も大きかった。受け入れ体制をどのようにすべきか課題が残った。

②研修生の専門性:

今回の研修生は日本語教育が専門ではなく、こちらの受け入れ条件と異なっていた。そのため、研修計画を大幅に変更する必要が生じた。受け入れ可否を判断する段階で、研修生本人についての詳細な情報を得るべきであった。

③事前の情報交換

外務省担当をはじめ関係諸機関、本人との情報交換が不足した部分があり、認識や感情の行き違いが生じたことがあった。それぞれの責任と義務、権利を明確にし、情報交換を密にするべきである。

以上

(文責:松岡洋子)

日本語・日本文化研修生修了レポート作成報告

1. 対象学生と指導の概要

日本語・日本文化研修生は世界各国の高等教育機関において日本語・日本学を専攻する学生が日本の大学に 1 年間留学し、各自の専門知識を高めることを目的として文部科学省が実施する。岩手大学国際交流センターでは、平成 16 年度は前期(平成 15 年 10 月～16 年度 9 月)は大使館推薦 1 名(ポーランド)、交流協定校の大学推薦 2 名(ロシア・中国)、後期(平成16年10月～平成17年9月)は大使館推薦1名(カザフスタン)、大学推薦1名(中国)の研修生を受け入れた。日本語・日本文化研修生は各専門の担当教官が指導教官となるが、国際交流センターに所属する学生である。

研修生は各自の専門分野の講義および日本語授業を受講し、知識・技能を高める一方、個別研究を行い、国際交流センターが主催する「修了発表会」において発表し、最終レポートを提出することが義務付けられている。

2. 平成15年～平成 16 年研修生の個別研究

当該年度の研修生、個別研究課題は以下のとおりである。なお、当該期において、交流協定校推薦の短期推進留学学生も個別研究に参加することを希望したため、レポートのみ提出した。

氏　　名	出　身	身分	研究課題
ペトラ ヴァーツラヴィーコヴァー	ポーランド	大使館推薦	保元・平治・平家物語における平清盛像
徐　慶雲	中国	大学推薦	日本語複合語の意味表現 － 中国語との関連研究－
ソフィア　ダンシナ	ロシア	大学推薦	ロシアと日本の少年法と刑法の比較研究
ニキータ　セレズニョフ	ロシア	短期推進	日本におけるヒッチハイク理論

学生は、国際交流センター担当教員が修了発表までのスケジュールを提示し、指導教員の助言のもとに個別研究を進めた。最終段階で、国際交流センター教員が文章の構成および修了発表用資料(スライドおよび発表用テキスト作成)について指導した。

3. 課題

日本語・日本文化研修生に対する 1 年間の研修計画が明示されていないため、研修生は各自の研修内容について曖昧な状態に置かれている。個別研究についても研修の始めに口頭で説明するのみで、指導教員との連携も不十分である。個別研究は、研修生たちからは意義のある活動として捉えられている。1 年間、岩手に滞在し、さまざまな体験を通して日本、あるいは各自の専門に対する理解を深めるが、個別研究はその専門分野での集大成と考えられている。

今後は 1 年間の研修計画を指導教員とともに作成し、研修初期に研修生に説明した上で、個別研究のテーマを早期に決定させるべきである。また、指導体制についても再構築する必要がある。

以上

（文責：松岡洋子）

教員研修プログラム個別指導報告

1. 教員研修プログラムの概要と国際交流センターの関係

教員研修プログラムは文部科学省が実施する途上国の人材育成事業である。岩手大学では最初の半年間の日本語教育を国際交流センターで行い、教育学部で1年間の教員研修を実施する。平成16年度の教員研修生は2名で、うち1名が日本語教育研修生であったため、国際交流センター日本語教員が個別研修の一部を担当した。当該研修生は通常、教育学部の専門科目の受講、学校見学等の教員研修専門教育のほか、国際交流センター日本語特別コース(中・上級日本語)も受講した。このほかに、当該研修生の専門性の特殊性を考慮して個別指導を実施した。

2. 個別指導の概要

研修生氏名: スリ ウランダリ

出身: インドネシア

研修内容: 初等教育における日本語教育法

主指導教員: 大野眞男(教育学部教授)

個別指導担当: 松岡洋子(国際交流センター)

個別指導期間: 平成16年10月～平成17年3月(火曜日13:00-14:30)

個別指導の内容:

①初等教育レベルの教材収集

外務省青年長期招聘事業の研修生に同行し、国際交流基金日本語国際センター図書室および(株)凡人社において教材、資料の収集を行った。特に、国際交流基金日本語国際センターでは、ニュージーランドで長年実施されている初等教育レベルでの日本語教育のナショナルシラバスを参照することができ、貴重な資料となった。

②教材分析(文型・語彙・表現型・機能・場面の洗い出し)

書店等で収集した教材のうち初等教育で使用できるものを選択し、教材分析を行った。使用した教材は以下のとおりである。

『みんなの日本語Ⅰ』(スリーエーネットワーク)　対照用基本文型抽出のみ

『Japanese for Young People』Ⅰ～Ⅲ(The Japan Times)

『にほんごをまなぼう』1(文化庁)

『こどものにほんご』1. 2(スリーエーネットワーク)

この他に副教材として多数の教材を参照した。各教材の提出文型、語彙、表現、言語機能、場面を抽出し、それぞれのリストを作成した。その後、インドネシアで活用が困難なもの、不適当なものを判断し、出現頻度、重要度などを分析した。

③カリキュラムデザイン(教材分析に基づき、インドネシアの初等教育に合わせデザイン)

インドネシアの初等教育6年間のシラバスを各項目別に選び、カリキュラム案を作成した。

3. 個別指導の効果

個別指導での作業の結果、インドネシアの初等教育のための新カリキュラムの基礎を作ることができた。日本語教育専門家が介入することで、体系的なカリキュラムデザインへの方向性が見えた。文型・語彙等のリストは帰国後さらに検討し、これから学年が進んでいく学習者のための教材作成にも活用できる。なお、個別指導での作業結果をまとめた報告書が研修生より国際交流センターにも提出された。

4. 課題

1年間の研修期間のうち半年だけの指導で時間が十分ではなかった。当該研修生のように国際交流センター教員が協力できる分野では、研修開始前に教員、研修生と研修計画を事前に検討することが有用である。今回の個別指導は、外務省招聘研修生と同時に指導を実施する旨、教育学部の指導担当教員に国際交流センター教員が申し出たことが契機となって始められた。そのようなことがない場合でも、積極的に研修に協力していくべきであろう。

このレポートでは、日本語教育分野についての連携の報告を行った。しかし、特定分野だけではなく、教員研修プログラムの実施に当たっては、外国人研修生の多様性、特殊性を考慮し、教育学部と国際交流センターとの連携体制と密な情報交換が必要ではないかと考えられる。研修生が日本語研修コース受講期間中に、国際交流センターは教育学部の受け入れ教員に対して教員研修プログラムの目的、目標、研修生の要望等についての情報提供を行ない、同時に、受け入れ教員は研修生本人の意向を常に確認しながら、1 年間の明確なコース設定を研修生に提示するよう研修生からの要望がある。岩手大学での教員研修プログラムの受け入れはまだ始まったばかりであり、今後の体制作りが求められる。

以上

（文責：松岡洋子）

理工系留学生教育・指導について（平成 16 年度）

理工系留学生教育としては、工学部学部学生のための学部内共通基礎科目として「基礎工学概論」と、農学部及び工学部の大学院生、大学院受験予定者、研究者を対象とする「理系日本語」（国際交流センター・日本語特別コース参照）がある。 ここでは、工学部学部学生について述べる。

1. 教育

留学生のために工学部における学部内共通基礎科目として「基礎工学概論」をおき、工学の基礎となる物理学、数学、化学に関する日本語で書かれている文章と、日本の工業事情を新聞記事、ビデオ等で紹介し、日本語の読解力と聴解力を養成すること、日本語で書かれた半導体基礎用語、日本工業規格についての用語を学ぶこと、日本語による報告書（レポート）の書き方を習得することを目的とする。授業内容と教材等については、2004 年度の本センター報告*)に詳述したので省略する。

受講者及び授業について：今期（平成16年度前期開講）の受講者は3名であるが、受講科目数の受講上限（22 単位）制限のため、正規の受講者は建設環境工学科生 1 名（#）である。他の2名の指導は、物理と数学の力を日本語、特に理系の漢字能力を高めるために現在岩手県内で使われている高等学校の標準的な教科書、物理ⅡB、数学Ⅱ,Ⅲを用い教室外学習としておこなった。

この3年間を通じて見る限り、留学生の理数のレベルでは大学1年での専門基礎科目を修得することにかなり困難があると思われる。現在行われている工学部1年次の理数補講の受講に加え、能力向上のための別枠のカリキュラムを措き、最近目に付く留学生の留年をなくする対策（入学時の理科と数学の成績基準を厳格にすることも必要であるが）を講じる時期に来ていると思われる。

（#）この学生について、学期末の成績報告を行う時期に成績報告表が担当教員へ送付されなかったので調べたところ、受講登録の際コンピュータ入力の不手際から受講の認定されず、そのため受講票も成績報告表も担当教員へ送付されなかったことが分かった。この受講入力ミスは担当教員が学生と共に教務の事務手続きを遡って調べたところ、学生の日本語理解力不足のために事務側の説明の詳細が理解されないまま放置された結果であることが判明した。日本人学生であれば「コンピュータ入力でエラー表示が出ましたが、登録は出来ました。後で来て下さい。」と事務に云われれば、あまり日を置かずに確認のために事務の窓口をたずねるところであるが、留学生には、“エラー表示が出ましたが、登録は出来ました” という言葉が主要であって、“後で来て下さい” という言葉の重要性が理解されなかったのである。“後で” という言葉が“確認作業”であることで、それの意味する事の重要性を理解することは留学生にとって難しいことをあらためて知らされ、大学側の注意が求められるところである。

2. 課外指導

最近留学生の留年が出てきた。原因は一義ではないように思われるが、ここでは二つの事について、留学生の人数も少ないこともありプライバシー保護の観点から学科を特定せずに、一般的な意味で少し述べる。

一つは、言葉の問題である。1年次は比較的に多くの日本人と接する機会が多く、また時間的に余裕もあり日本語の初級・中級の授業を受講出来てかなりの上達を見るのであるが、2,3年次になると専門教科の講義、実習等で日常的に日本語を用いての自発的会話をする機会が非常に少なくなる傾向にある。そのために日本語能力が停滞し、初級・中級を越えて上級日本語を修得するための障壁が高くなることも相俟って学習意欲の低下に繋がるものと見受けられる。その結果、専門科目の単位修得も困難となる。

改善策として、専門科目について専門的内容に沿っての日本語の個別指導を試みた。しかしながら、教員自身の授業、会議と学生の余裕時間との折り合いが付かないために十分な対応が出来ず、最初から実行できない場合や、実行しても途切れ状況の対応のため中途で学生の方が諦めてしまうといったことで、十分な成果を得がたい。

他の一つは、学生自身の適性に関する問題である。受入れたからには当該学生に対しその学科の専門科目を教育し修得させることが出来ると判断した事になる。日本語習得状況の問題の他に、これは入学して早い時期に何らかの適性判断を行い、18年度から研究生に対して導入される転学科や転学部等の道を学部生についても講ずる必要があろう。

最後に、前回の本センター報告に記した留年留学生は、多くの教員の援助を戴き、この3月卒業見込みとなりましたことを付記し、関係各位のご尽力に感謝します。

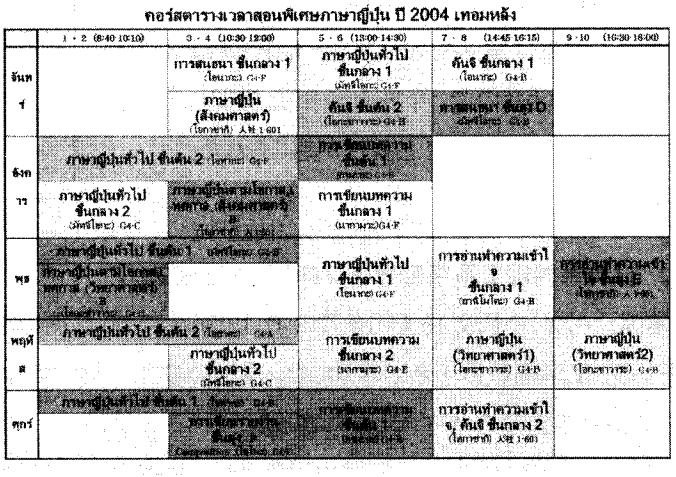
*) 岩手大学国際交流センター 2004
—岩手大学留学生センターの歩み— 『留学生教育と国際交流』(2004年10月 発行)

(担当 : 小笠原 洋光)

海外での国際交流センターの活動報告

1. 海外での活動の意義

国立大学の独立法人化に伴い、元国立大学もより質の高い学生を求めて国内の私立大学や海外の諸大学との競争を意識せざるをえない状況となった。これまで、国費留学生の受け入れを中心に、岩手大学に進学を希望する私費留学生も受け入れてきたが、戦略的に留学生をリクルートしてきたという状況ではなかった。しかし、良質で授業料収入を期待できる留学生の確保は、日本における 18 歳人口の減少に伴う受験者数の減少への対応策として重要度が増し、国際交流センターとしては韓国とタイをこの条件を満たす学生の確保先として選び、重点的にリクルートを行うこととした。また、英語圏への岩手大学生の派遣先を確保するために米国で開催されるNAFSA（米国の国際教育学会）にも参加して、米国の大学との交流も促進する方針である。



タイ語で記載された日本語授業の時間割

韓国とタイで開催される日本留学フェアに参加するにあたって、大学の概要、入試情報、日本語授業の時間割など、できるだけ現地語で最低限の情報提供をおこなうようにした。これは、留学を希望する学生の日本語の能力が限られているという理由のみならず、多くの場合保護者が同伴で父母への説明が必要となるからである。岩手大学のブースでは留学生が現地語で案内する大学紹介のビデオを流し、韓国では岩大に留学中の在学生、タイでは岩大にかつて留学していた卒業生に通訳を頼んだ。主催者に申し込めば通訳の手配はしてもらえるが、詳しい内容の理解度や熱意の観点から言えば在学生、卒業生は格段に優れていたと言える。

2. 日本留学フェア

2.1 韓国

韓国で開催された日本留学フェアは釜山とソウルの二会場で一日ずつ開催された。 教員 1 名、事務職員 1 名、通訳として韓国人在学生 1 名の 3 名で参加した。釜山からソウルへの移動と、ブースの設営、撤収を毎日しなければならなかったのが少し大変だった。

韓国では人文社会科学部、教育学部への編入学に関する質問、宿舎に関する質問、一般入試の試

験科目についての質問、入試の合格ラインに関する質問などが多かった。特に、専門学校卒業後の編入希望者が多かったが、これを不可とする日本の大学が多かったようである。韓国の専門学校は日本のそれとは異なり短期大学扱いをされているものが多く、履修科目によっては編入が可能である。岩手大学では編入の可能性についての情報を提供し、条件が合えば編入が可能であると伝えた。「他の大学ではだめだといわれたのに、どうして岩手大学はよいのか」といぶかる声が聞かれた。どの学校なら編入が可能なのかなどの細かい情報を入手し、その場でアドバイスできる体制を整える必要性を感じた。

授業料に関しては、韓国の大学の授業料が値上がりしたこともあり日本留学に対する高値感は薄いようである。教育熱が高く、教育費があまり変わらないなら日本に留学させて付加価値をつけさせたいという気持ちが親にあるように感じられた。

韓国人学生は留学情報センターを情報源にしている人が多いようなので、今後そういった機関に岩手大学の情報を提供していく必要性が感じられた。

日本留学フェア(韓国)の開催概要	
開催日程	釜山:9 月 10 日(金)、ソウル:9 月 12 日(日)
開催場所	釜山:釜山ロッテホテル
	ソウル:セントラル・シティ
来場者数	釜山:1328 名
	ソウル:2563 名
岩手大学ブースへの来訪者数	釜山:40 名
	ソウル:60 名

2.2 日韓共同理工系学部留学プログラム推進フェア

韓国、ソウルで平成 16 年 10 月 2 日 13:30－17:00 に開催された当該フェアに国際交流センター教員 1 名、工学部教員 1 名が参加した。現地の参加者数は第 6 期試験合格者 150 名とその保護者で、15 名が岩手大学のブースに立ち寄った。

来訪者の質問としては岩手県の位置、専門について、留学生の進路状況、試験の成績が芳しくなくても留学が可能か、など幅広かった。以前は資料参加(資料を会場に送付するのみの参加)をしたことがあるが、これはほとんど意味がないことが判明した。

今後の課題として工学部の受け入れ態勢やプログラムの位置づけについて連絡を密にする必要性が感じられた。

2.3 タイ

バンコクで開催された日本留学フェア(タイ)には国際交流センター教員 1 名、事務職員 2 名が参加し、岩大卒業生が昨年に引き続き通訳を引き受けてくれた。今回は人手が十分あったので会場入口付近においてタイ語でかかれた岩手大学の概要を配布した。半纏やのぼりの旗、

日本留学フェア(タイ)の開催概要	
開催日程	11 月 6 日(土)、7 日(日)
開催場所	インターコンチネンタルホテル
来場者数	2796 名
岩手大学ブースへの来訪者数	158 名

ずっと流れ続ける大学紹介のビデオ映像などがかなり目を引いたようで、他大学から参考にしたいのでと撮影の申し込みがあり、「岩手大学の前はいつも人だかりがありますね」などというコメントもいただいた。

昨年ブースを訪れた親子が再び岩大ブースに立ち寄って研究テーマについてのより詳しい情報についての問い合わせをしたり、昨年持ってくると言い残していた成績証明書を持ってきて入学が可能かどうかを相談する人たちもいた。継続の重要性を感じた。渡日前入学許可制度が導入されているかどうかが、留学生にとって大きな問題であることは変わりなく、依然としてこの問題をクリアできていないことが課題として残った。

3. NAFSA(国際教育学会)

NAFSAは米国で最大の国際教育学会で、毎年開かれる年次大会には5000人規模の参加者が集まる。今年度はメリーランド州バルティモア市のコンベンション・センターで5月23日から28日に開催された。国際交流センターからは教員1名が参加した。

日本学生支援機構(JASSO)が毎年日本留学の総合案内ブースを出しており、岩手大学は昨年より時間割り当てのテーブルを申し込んで協定大学の担当者と打ち合わせを行ったり、新しい協定先の情報を収集したりしている。米国の大学はたいていこの年次大会に参加するので、普段できないプログラムの細かい打ち合わせなどに便利である。他の留学フェアと異なり、ここにはターゲットとなる学生本人が参加することはないが、学生のアドバイザーなどと出会えるので効果が大きい。

大変広い展示場には約250の大学や機関がブースを出し、オーストラリア、北欧、韓国なども集合体としてブースを出しているので、米国だけではなく学生交流を行う様々な国との接触が可能である。

4. 協定校訪問 —テキサス大学オースティン校

テキサス大学オースティン校との協定作業が進みつつある段階であった5月末に、国際交流センター教員がテキサス大学を訪問した。受け入れ学生のアドバイザー、履修科目のアドバイザー、派遣学生のアドバイザーなど学生数5万人のマンモス大学なので、縦割りがかなりはっきりしていた。交流相手の仕事に関する役割分担を正確に理解し、オフィスの構造や雰囲気なども知っておくことが今後の交流事業をスムーズに進めるためには大変重要である。

時間のあるときにオースティンの公共交通機関も利用して頻度や料金なども調べた。街の雰囲気や物価、寮とキャンパスの距離などを実際に見ておくことは今後の派遣学生へのカウンセリングに役立つ。

5. 海外大学視察—タマサート大学

日本留学フェア(タイ)でバンコクを訪れた際に、タイの名門校タマサート大学を視察した。この大学は英語によるタイ語・タイ文化の授業も開講しており、留学生を多く受け入れている。また、大学グッズもたくさん取り揃えているので、今後この取り組みを本格的に進めていこうとしている岩手大学にとって

は参考になることが多くあった。

6. 留学生関連機関訪問

日本留学フェア(タイ)に参加したときに、日本への留学を支援している機関について勉強するため、国際交流基金バンコク日本文化センターとOJSAT日本語学校を訪問した。

6.1 国際交流基金バンコク日本文化センター

子供から社会人まで対象の日本語クラスがある。図書やビデオライブラリーなど完備。廊下には奨学金情報、就職情報などが掲示され、日本の大学のポスターなども多かったが、これまで岩手大学は海外にポスターを配布するなどのPRをしてこなかったので、今後は存在をアピールする活動に力を入れていく必要性が感じられた。岩手大学資料を提供してきた。

6.2 OJSAT(Old Japan Students' Association, Thailand)日本語学校

タイ国元日本留学生協会がボランティアの一環として始めた日本語学校。全国 3 校あり、全部で2500 名程度の学生がいる。バンコクの学校は7つ教室があり、ゼロ初級から日本語能力試験 1 級をめざすレベルまで対応している。岩手大学資料を提供してきた。

7. 今後の課題

7.1 岩手大学の知名度を上げる努力

海外でリクルート活動をしていて痛感するのは、現地での知名度の低さである。「岩手はどこにあるのか」から始まって、「先生はなまりが強くて標準的な日本語が話せないのではないか」といったことに至るまで、魅力ある留学先としてのイメージができるまでの道のりが遠いことを感じる。留学情報センターや日本語学校などには日本の大学からのたくさんのポスターが貼られているが、ほとんどどこにいっても同じ大学のポスターが貼られていることがわかった。まずは名前を聞いたことがあるというレベルまで持っていく努力が必要である。

7.2 渡日前入学許可制度の導入

留学生が私費で留学しようとするときには、受験のためだけに来日させる現在の入試制度では留学生の経済的負担が大変大きい。大学の教育プログラムやサービスで他大学と競争する以前に、留学先としての候補からはずされてしまうのが現実である。少しでも早くこの制度導入を図らなければならない。

(文責:尾中夏美)

米国アーラム大学サイスプログラム関連事業報告

1. アーラム大学サイスプログラムと本学との協定について

米国インディアナ州にあるアーラム大学は毎年岩手県盛岡市にサイスプログラム(SICE: Studies in Cross-Cultural Education)に参加するアーラム大学生と引率教員を派遣してきた。サイスプログラムとは市内の中・高校で教育についてのインターンシップ、日本語研修および引率教員による授業で参加学生に単位を出す、アーラム大学の海外研修プログラムである。

岩手大学ではアーラム大学と平成15年8月11日に学術協定を締結して、引率教員によるサイス学生に対する授業の場所提供と彼らへの日本語教育の提供を始めた。現在全学の学生交流の覚書を取り交わす手続きを進めている。通常の学生交流は1, 2名の派遣学生を1学期から2学期の期間、協定校に派遣して実施される。サイスプログラムでは約3ヶ月のプログラムに10名程度の学生が参加するため、岩大生の派遣に関しては受け入れと派遣の学生数とプログラム料金などのバランスを協議しながら進めることとしている。

サイスプログラムの期間は8月下旬から12月初旬で、ホームステイをしながら研修を進める。毎年参加人数は変わるが、今年度は4名の学生が参加した。

2. 日本語教育

岩手大学では10月から後期の講義が始まることから、9月はサイス学生と希望する岩大留学生に特別補講を提供した。授業内容は表1の通りである。

表1.サイスプログラムに提供した日本語教育一覧

学 期	レベル	開講曜日	提供コマ数	受講サイス学生数	学習内容
9月	初級II	火・金	2コマ	1	「みんなの日本語1」「げんき1」復習
	中級I	月・水	2コマ	3	「日本語集中トレーニング」4課分
後期	初級II	火・金	2コマ	1	「みんなの日本語2」35課まで
	中級I	月・水	総合2コマ	3	「現代日本語コース中級1」4課まで
			漢字1コマ	3	「Intermediate Kanji Book vol.1」
			読解1コマ	3	「大学・大学院留学生の日本語1 読解編」4課まで

3. ハローパーティーとイングリッシュ・カフェ

岩手大学生にサイス学生との出会いの場を提供する目的で、ハローパーティー(アーラム大学主催)とイングリッシュ・カフェ(岩手大学主催)の2度の交流事業を企画した。内容は表2の通りである。

ハローパーティーは出会いを主たる目的としているので使用言語に制限がない。一方、イングリッシュ・カフェは少人数で英語での会話が楽しめるように設定し、“カフェ”のようにお茶とお菓子を食べながらのリラックスした雰囲気での交流の場となっている。サイス学生は岩大生のために全て英語で会話をすることに取り決めている。参加者には留学生もいた。

表 2.事業内容

事業名	日 程	参加人数
ハローパーティー	10 月 14 日(木)16:30－18:00	40 名
イングリッシュ・カフェ	10 月 28 日(木)16:39－18:00	35 名

4. 学内留学

サイス学生は引率教員が専門とする講義をプログラムの一環として受講する。今年度からの新しい試みとして岩大生のための学内留学を始めた。岩手大学とサイスプログラム担当者とで協議して、若干名の日本人岩大生が引率教員の講義を聴講できることとなった。今年度の概要は表 3 の通りである。

表 3.学内留学概要

開講日程	平成 16 年 9 月 2 日(木)から 11 月 25 日(木) 毎週木曜日 13:00－16:00
テーマ	日本文学と文化
受講の形態	聴講生として授業に参加し単位は認めない
受講条件	十分な英語力と意欲を有する人文社会学部または教育学部の学部生または院生
選抜方法	各学部の担当教員が選抜し 3 名が選ばれた

終了後参加者に対するアンケートをとった。満足度は高く、「日本の授業との違いで一番対応が大変だったこと」としてどんなことにも自分の意見を求められたので、自発的に発言できる能力の必要性を痛感したということが共通していた。

また、「自分の中の変化」については全員が英語の聴解力がよくなったと感じており、英語で話すことへの抵抗感がなくなったなど学ぶターゲットとしての英語から、学ぶための道具としての英語へのシフトが起こりつつあることが感じられる。

5. 英語による特別講義

サイスプログラムの受け入れ期間中に一度、引率教員は特別講義を実施することになっている。今年度の引率教員は英文学が専門であったため、表 4 のような講義となった。講演に先立って講義内容の概略を英語で作成してもらい、こちら側で講義の骨子を日本語に翻訳して当日の配布資料とした。また、英語での講義を受けた経験の少ない日本人学生にとってはかなり難解であったと思われるが、講

義はパワーポイントを使って行われたので視覚情報が多く理解の一助になったと思う。

表 4.特別講義概要

開催日時	平成 16 年 11 月 15 日(月) 16:30－18:00
講演題目	義理 versus 人情, Duty versus Passion, in Shakespeare's Tragedy of Antony and Cleopatra
参加人数	12 名

6. サイスプログラム学生対象の英語による特別授業の提供

サイスプログラム受け入れ期間中に一度だけ、岩手大学で開講している岩手大学教員が英語で授業を行う国際交流科目の中から、サイスプログラムの引率教員が1科目選んで、サイス学生対象に特別授業を実施することにしている。今年度は表 5 の要領で実施した。

表 5.特別授業概要

開講日時	平成 16 年 10 月 28 日(木) 13:00－16:00
授業題目	The Psychological Aspects of the Japanese
担当教員	人文社会科学部教員

7. サイスプログラムとの交流の意義

7.1 広範な交流

通常の学生交流は 1, 2 名という極めて少人数の交換学生と彼らと交流のあるごくわずかな学生のみに受益者が限定される傾向にある。しかし、短期ではあるがまとまった人数の学生が多くの岩大生と交流の機会を持つことにより、本来国際交流に関心の薄かった、または関心は持っていても交流の機会を自ら作る勇気の持てなかった学生に働きかけることが可能となった。

7.2 英語を使用する機会の提供

外国語として英語を履修する学生が多いが、実際に使用できる機会があまりないためモーティベーションを維持できず、英語学習が構文を暗記し訳読するだけの「死語化」する傾向にある。同年代の米国大学生との交流を持つことで英語を実際に話す機会を提供することは、異文化理解と語学力維持の両面から大変有意義と言えよう。

7.3 学内留学による留学疑似体験

語学は学ぶべきターゲットから知識を得るための道具として使用されるようになって、本当に実力がつく。学内留学を今回経験した学生は最初から意欲の高い学生たちであったが、アンケートで学習そのものへの意欲がさらに高まり、英語の運用能力も上がったことを感じるという報告があった。

協定ができても実際に留学するには費用や時間の問題など学生が解決しなければ問題は多い。学内留学という機会を設けることにより、学ぶための選択肢が増えたことの意義は大きい。

7.4 英語による講義受講の体験

学内留学のように連続した授業を受けられない学生でも、英語を学ぶ学生は英語による講義を少し体験することで「生の英語と本場の授業」を体験できる。全ての内容を理解することは無理でも、少しずつ理解度が増えると努力の成果が感じられ、さらなる努力につながる。サイスプログラム関連の講義に限らず、英語で語学学習以外の内容についての講義に触れる機会を今後も増やしていくことが重要である。

（文責：尾中夏美）

西北農林科技大学サマースクール報告

1. プログラム概要

今年度初めて、国際交流センターが企画して全学対象の中国語・文化研修プログラムを実施した。初回ということもあり、参加者には大学から若干の補助を出した。研修の概要とスケジュールは表 1、表 2 の通りである。

表 1.プログラム概要

研修場所	中国陝西省楊凌市西北農林科技大学
宿舎	新天地酒店(大学経営のホテル)
参加者	学生 5 名、教員 1 名、職員 2 名
引率	国際交流センター教員 1 名、 事務職員 1 名(8 月 11 日まで滞在)

表 2.研修スケジュール

日　程		活　動
8 月 5 日		盛岡 ―成田
8 月 6 日		成田-西安-楊凌　ﾁｪｯｸｲﾝ
8 月 7 日～27 日	午前	中国語学習
	午後	中国学生との課外活動： 卓球、バスケットボール、将棋、麻雀等、中国地理、中国歴史、伝統行事、日本語と中国語の歌練習、農家体験
	週末	文化理解： 兵馬俑博物館、華清池、陝西省博物館、大雁塔、法門寺、乾陵、五丈原、昆虫博物館、碑林、動物園など
8 月 27 日		楊凌-西安-成田
8 月 28 日		成田 ―盛岡

2. 募集案内と出発までの準備について

プログラム実施決定をうけて、募集案内とポスターを作成した。5 月の連休明けに完成させて 5 月末から 6 月上旬にかけて説明会を実施した。しかし、募集期間が十分とれなかったことで周知が徹底できず説明会への参加者も少人数にとどまった。プログラム代金は研修期間に比べて割安ではあるが、学生にとっては即断できる金額でもないことから、参加したい意図はあっても実際に踏み切れないケース

があったと思われる。

国際交流センターの兼務教員への参加者発掘の依頼、参加希望者への個別対応、参加費の補助を各学部にお願いするなどできる限り参加しやすい環境を作るような努力をした。

3. プログラム内容について

現地でのオリエンテーションのときに一日の時間割と研修期間中のスケジュールが渡された。宿泊施設内の会議室での授業であったので休憩時間に自室にもどることが可能で疲労が軽減されたと思われる。一日の流れは以下のとおりである。

表 3.一日の流れ

時 間	活 動
7:00 – 7:30	起床
7:30 – 8:00	朝食
8:30 – 9:20	一時間目
9:40 – 10:30	二時間目
10:50 – 11:40	三時間目
12:00 – 13:00	昼食
13:00 – 15:00	午後の休息
15:00 – 18:00	課外活動
18:00 – 19:00	夕食
19:00 – 22:00	自由活動
22:00	就寝

4. 宿舎・食事について

宿舎はさまざまな機能がついていて大変快適な滞在ができた。クーラーもついていたので夜なども安眠できた。宿舎のスタッフが大変面倒見がよく、マネージャーはこの日本人グループがお気に入りだったようで、暇を見つけては食事に連れ出したり中国語を教えてくれたり帰りには土産までくれるなど、とても人懐こい人だった。

食事に関しては、朝食以外はホテルのレストラン奥にある別室で特別フルコースのような料理が用意された。メニューがたくさんあるのは嬉しいが、日本人の胃にはかなり重いものが多かった。

5. アンケート調査より

帰国後参加者全員を対象にアンケート調査を実施した。以下がその結果である。

5.1 実施時期・期間・費用などについて

- 実施時期　ちょうどよい 7　その他 1
- 実施期間　今回の 3 週間でちょうどよい 4　2週間でよい 1　4週間がよい 1
- 参加費用　妥当である 6　高すぎる 2

5.2 プログラムの内容について

表 4.プログラム内容の満足度

	大変満足	まず満足	普通	やや不満	大変不満
食事	3	4	1		
授業内容	2	3	3		
宿舎	4	4			
課外活動	1	4	2	1	
週末旅行	5	3			
職員の対応	7	1			

表4からプログラム全体としての満足度は高かったことがわかる。特に、現地の職員が丁重にもてなしてくれたことで、彼らがこのプログラム発展にかける意気込みを感じることができた。

5.3 事前に知りたかった情報について

参加者が出発前にあればよかったと思う情報についてアンケートよりまとめたのが以下の項目である。

- 中国の習慣についての情報
- 使用教科書・授業についての情報
- 先生についての情報
- 学生との交流会についての詳細
- 現地の気候についての情報
- 西安についての情報

6. 報告会の実施

10 月 27 日(水)午後 5 時 30 分よりサマースクール帰国報告会を学生センター3階会議室において実施した。参加者以外に約 10 名の教職員、学生の参加があった。報告会で「普段接することのできない大学職員との交流がよかった」「人数が少なかったのでチームとして団結できた」「中国語が不自由だとつい英語に流れてしまった」などのコメントが聞かれた。

7. 改善案

アンケートや報告会で聞かれた改善案をまとめたのが以下の項目である。今回は初めての企画でお互いに手探り状態だったので、不備な点も多かったが次年度以降に改善を重ねていきたい。

- 中国の学生との交流を増やす
- 事前の中国語講習会の開催
- 海外旅行に関するマナー学習会の開催
- 期間を短縮しても参加費用をもっと安価にする
- 基礎学習より実践的な中国語学習に重点を置く
- 学習時間を圧縮しないような観光の企画
- イベント続きで疲労が蓄積するので休養日を設ける
- 将来的に単位の認定をしてほしい
- 準備が試験期間中にかかるので出発日を少し遅くする
- PRの時期を早く、内容をわかりやすくする

（文責:尾中夏美）

海外留学支援報告

1. はじめに

岩手大学ではこれまで学生交流に関して全学的な取り組みが遅れており、英語圏への全学部対象の交換留学制度も皆無の状態で、教員が個別にプログラムを探して学生の希望に応えたり、語学研修の場合には引率を行ったりしていた。留学を希望する学生は1年間休学して個別に留学するしかなかった。そのような現状のなか、大学としては単位互換を可能にする英語圏への交換留学制度の立ち上げが急務であった。また、海外での研修や留学に関する情報を提供することでより多くの学生が関心を持てるようにする必要性もあった。

2. 海外留学・研修オリエンテーション

前年度は初めての留学オリエンテーションを実施したが、今年度は学生への周知をもっと徹底し学生の興味関心に合致するような形式で企画することにした。岩手大学生協が TOEIC や TOEFL の受験業務を手がけることから、その関連事業を計画中だったので共同事業を提案し、表1のような海外留学・研修オリエンテーションを実施し、これには当初予測をはるかに上回る60名が参加した。

表 1. 岩手大学生協とのジョイントプログラム

5月13日(木) (大学生協企画)	16:30～17:30	TOEIC テストを知ろう－TOEIC サンプルテスト体験
	17:30～19:00	使える英語の効果的学習法－外部講師の講演会
5月14日(金) (大学企画)	16:30～17:00	海外留学支援体制について、TOEFLについて
	17:00～18:00	大学派遣プログラム紹介 全学、学部間学生交流プログラムについて担当教員が説明
	18:00～18:20	国際ボランティアプロジェクトについての説明
	18:20～18:50	海外留学体験者による体験談
	18:50～19:00	質疑応答

3. 個別留学相談

留学情報を提供すると同時に個別留学相談も実施し始めた。月別留学相談件数は表2のとおりである。英語の学習法や将来設計の中での海外研修の位置づけなど、相談内容は多岐に渡る。決められた時間は設けず、相談者の便宜を図って相談者が都合の良い時間帯を連絡し、留学カウンセラーと話し合いで相談時間を決めるという方式をとっている。

表 2. 月別留学相談件数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
のべ相談件数	2	0	3	0	1	2	1	7	1	2	5	3	27

4. 語学支援 ― スーパー・イングリッシュ

最も留学希望者の多い英語圏への交換留学制度が整った場合、学生には半年から 1 年の期間、英語で行われる授業の単位を持ち帰ることが可能なレベルの英語力が要求される。多くの大学ではTOEFL550 点(PBT)を要求しているが、普通の大学生で 500 点を超える英語力を持っている学生はごく少数である。そこで、交流をスムーズに運営するためにも学生の英語力アップの支援が必要となった。

この事態に対応するために、国際交流センターでは平成 16 年 10 月よりスーパー・イングリッシュプという英語特訓プログラムを立ち上げることにしたのである。

4.1 受講資格と受講者数

スーパー・イングリッシュは英語圏で留学生を対象に実施されているESL(外国人対象の英語研修コース)の形式を模し、受講資格を以下の条件のいずれかを満たしていることとした。

- TOEFL または TOEFL-ITP で 480 点以上 530 点以下
- TOEIC で730点以上
- 英語検定で 2 級以上

この中で英検 2 級が一番ハードルとして低いことになるが、これを準 1 級まで引き上げると受講対象者が極端に少なくなることが懸念される。そこで日本の大学レベルで、ある程度の基礎力があるとみなすことのできるレベルとして、2 級を採用することにした。受講者のほとんどは英検 2 級レベルであった。表 3 は所属別の受講者一覧である。

表 3. 受講者の所属別一覧

所属	1年生	2年生	3年生	4年生	その他
人社		3	4		
教育	1	1			
農学	1	2	1	1	
その他					1

4.2 プログラムの内容

このプログラムは英会話練習ではなく、修了時点で TOEFL530点を取ることを目標に、綿密な授業

計画とたくさんの課題とによって進められる特訓プログラムである。受講者には授業時間中日本語の使用が禁止される。全体の構成は表 4 のとおりである。

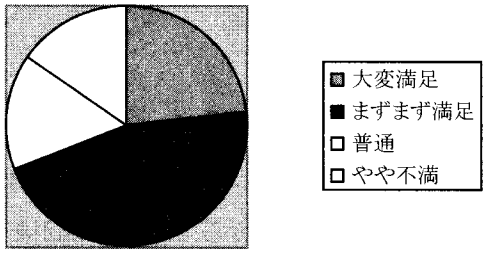
表 4. スーパー・イングリッシュ概要

研修日程	2005 年 10 月 1 日(月)～12 月 22 日(水)の 11 週間で月・水・金の週 3 回
運営の形態	単位は与えない。授業料徴収。
授業時間	午後 6 時 20 分～7 時 50 分(90 分)
講　師	英語教授法を専門とするネイティブスピーカー(英国と米国各一名)
授業内容	月:聴解を中心とした活動 水:読解と語彙強化を中心とした活動 金:作文やレポートを中心とした活動

4.3 受講者の感想

15 名の受講者のうち 13 名からアンケートが回収できた。受講者の満足度は図 1 にあるとおり「大変満足」と「まずまず満足」を合計すると全体の69%にあたる 9 名で概ね良好であった。特に自分ひとりで努力しても TOEFL の成績がなかなか上がらず、英語の学習方法がよくわからなかった学生にとってはよい刺激になったようである。

図1. 受講者の満足度(回収数:13)



受講者は研修終了後すぐに TOEFL-ITP を受験した。15 名の受験者のうち英検 2 級レベルが 10 名であったが、受講者のうち 7 名が 500 点以上をスコアできた。

平成 17 年度からは春と秋の年 2 回開講することにしている。

(文責:尾中夏美)

学生交流支援活動報告

1. チューター・会話パートナーオリエンテーション

学内にいる留学生と日本人学生の接点を作るひとつの方法としてチューター制度と会話パートナー制度がある。チューターは国費留学生や交換学生などに対して制度として有償でつけることになっているものの他に、私費留学生で必要な場合にはボランティアチューターを募集する。また、日本語の会話練習の相手を希望する留学生には会話パートナーを紹介する。

このような制度は留学生との交流に関心はあってもどこから始めればよいかわからない日本人学生には人気がある。今年度は5月10日(月)にオリエンテーションを実施したが、参加者は40名にのぼった。

前年度は登録した学生をリストアップして、必要が生じた場合に個別に連絡をとっていたが、登録した学生から、登録したものの活動のチャンスがなかったとの不満が出た。教員が必要な人数を確保するために個別に連絡をとるのは時間と労力の面から限界があることから、どうしても身近な学生に偏り勝ちであった。そこで、今年度はウェブにマニュアルや登録窓口を設置して、カテゴリー別に登録し、必要な場合には時間帯や必要な語学力などの条件を明記したメールを一斉送信することにした。これにより、瞬時に情報が登録者に渡りこちらの条件に合う学生を公平に採用することが可能となった。

2. 帰国報告会 —国際ボランティアプロジェクト

最近海外でのボランティア活動を希望する学生が増えている。安全なプログラムであること、経費がかかりすぎないことなど条件があるが、今年度海外研修のオリエンテーションを実施したときにCIEEの国際ボランティアプロジェクトについての説明も実施し、その結果岩手大学から5名の参加があった。参加者にはアンケート調査を実施し、また関心のある学生が参加しやすいように体験報告会も企画した。

今回はドイツに2名、タイに2名、イタリアに1名が参加した。語学の上達よりも精神的な強さや価値観の多様性についての認識、国際協力のありかたの学習、日本の贅沢さを再認識など、深い学びが感じられた。

報告会は11月16日(火)に開催した。授業の都合などで農学部と人文社会科学部所属学生各1名ずつ計2名が発表を行った。現地での写真を中心にパワーポイントやプロジェクターなどを使って質問などを受け付けながら、どのような旅行をしてきたのかを報告した。

3. タイ、タマサート大学生との交流会

タイ、バンコクのタマサート大学日本語学科の学生一行がかねてから親交のあった岩手県西根町にホームステイプログラムで訪問するので、岩手大学の学生と交流の機会を持ちたいと引率の先生から

連絡が入り、表 1 の要領で交流会を持った。

表 1. 交流会概要

交流日時	平成 16 年 10 月 15 日(金) 13:00－15:00
訪問団の構成	タマサート大学日本語学科学生 13 名、引率教員 1 名
岩手大学側参加者	10 名(内タイ人留学生 2 名、中国人留学生 1 名)

授業時間と重なっていたために参加できた学生は少なかったが、日本語学科の学生はかなり日本語が堪能なので学生同士の意思疎通には支障がなかった。交流を持った学生たちはぜひこのような機会をまた作ってほしいと希望していた。

(文責:尾中夏美)

国際交流会館活動記録

1. 会議等

1.1 国際交流会館オリエンテーション(前期) ・・・ 英語(尾中先生)と中国語(会館留学生)の通訳

日 時 : 平成 16 年 4 月 28 日 18 時 ～ 20 時

担 当 : 国際交流センター教員、国際課職員

目 的 : 年度始めの会館住人の顔合わせと会館利用の説明会

1) 主事挨拶

2) 教職員の紹介

3) 会館住人の自己紹介

4) 会館の利用上の諸注意・・・橋本係長

5) 生活上の必要事項の説明;特にごみ処理・・・寺田会館事務員

6) 懇親会

7) 閉会

1.2 国際交流会館オリエンテーション(後期)

日 時 : 平成 16 年 10 月 28 日 18 時 30 分 ～ 20 時

担 当 : 国際交流センター教員、国際課職員

(*) 前期と同様の内容・方法で行う

1.3 国際交流会センター運営委員会(国際交流会館運営委員会を兼ねる)

日 時 : 平成 16 年 9 月 3 日 11 時 ～ 12 時 40 分

場 所 : 事務局第一会議室

議 題

・ 国際交流会館関連規則の制定及び 10 月期国際交流会館入居者の選考について

・ 岩手大学国際交流会館運営委員会の担当委員の選考(各学部より 1 名推薦)

1.4 国際交流会館運営委員会

日 時 : 平成 17 年 3 月 9 日 9時 ～ 10 時 30 分

場 所 : 学生センター会議室

議 題

1. 国際交流会館及び国際学生宿舎への入居者選考基準の改正について

2. 平成 17 年度入居者の選考について

3. その他

2. 平成 16 年度国際交流会館避難訓練

会館住人の安全確保ために、本年度は火災時の避難訓練を、盛岡消防署（上田署）の協力を得て計画し、実施した。当日は、台風接近のため消防署は緊急配備で出動し、国際課の職員のみで以下の要領で行った。

国際交流会館避難訓練実施報告

【実施日時】 平成16年11月27日（土） 午前10時～午前10時40分

【天　　候】 薄曇り・時々小雨・強風

【参加人員】 会館居住者18名、小笠原会館主事、国際課 橋本、千葉

【訓練概要】 2階ランドリー室からの出火を想定

① 会館内に緊急放送（居住者により日本語・英語にて）

② 盛岡中央消防署上田出張所への通報

③ 会館前庭への避難、人数確認

④ 消化器使用訓練

【実施内容】

AM 9:30 消化器・灯油・バケツ等準備、出火想定場所表示

AM 9:50 盛岡中央消防署上田出張所より電話があり、強風による被害警戒のため出動中で本日の避難訓練には立ち会いはできない旨連絡が入る。

AM 10:00 火災警報鳴動

AM 10:03 館内放送（ 担当：ｱﾀﾞﾓｱ ｻﾋﾞﾅ、日本語及び英語 ）

上田出張所への通報（ 担当：ｱﾀﾞﾓｱ ｻﾋﾞﾅ ）（数回電話するが通話中で繋がらず）

避難開始

AM 10:08 避難完了・会館前集合人数確認 18 名

AM 10:10 消火訓練（模範演技：千葉、訓練：ﾍﾟﾚｽ、宋思霖、ﾓﾆﾙｻﾞﾏﾝ）

（強風のため、火気は使用せずｺﾝｸﾘｰﾄﾌﾞﾛｯｸを火元に見立てる）

AM 10:20 会館ラウンジに集合、小笠原主事・橋本から下記各事項についての説明および質疑応答

- 避難経路の確認について
- 避難の際の消火確認について
- 非常放送装置の使用方法
- 消防署等への通報について

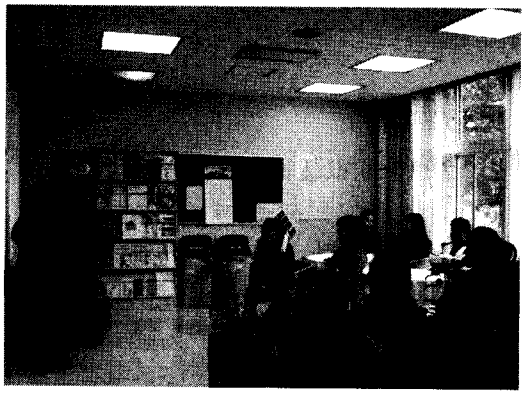
【反 省 点】

今回は初めての避難訓練ということもあり、留学生には訓練自体がどういうものかイメージできず、訓練開始時間前にラウンジに集合する者が数名いた。また、火災報知器の非常ベルが鳴り続けていても、居室に居たり、睡眠を続けていた者も数名いた。

今後、改善を要する点等については、下記事項があげられる。

- 各居室からの避難経路についての周知徹底
  - ⇨ 図示できるものは図示する
- 館内防火扉、消化器等の防災設備についての周知
  - ⇨ 設置場所の表示
    簡易な設備の取扱説明書
- 館内放送装置の使用方法および放送内容の掲示(日本語・英語・中国語等)
  - ⇨ 簡易な設備の取扱説明書
- 非常時の通報方法についての掲示(日本語)

また、訓練終了後の質疑応答では、火事の際の避難よりも地震の際の避難について関心が高いことがわかり、新入居者のためのオリエンテーションの際など折りにふれ、防災知識の提供が必要と思われた。



反省会

消火器使用訓練

3. 施設利用関係

留学生の日本語の学習、情報交換や交流を深めるために施設使用許可書を備え、広く施設活用の便宜を図った。 本年度の利用状況を下表に記す。

岩手大学国際交流会館の利用(平成 16 年度)

年 月 日	時 間	目 的 (世話人)	参加人員
16. 4. 24	12:30 ～ 16:00	新留学生歓迎会(AVIS)	7 名
16. 5. 8	20:00 ～ 22:00	パーティ(マレーシア留学生)	18
16. 5. 15	14:00 ～ 16:00	留学生とのおしゃべり相談会(AVIS)	
16. 5. 15	18:30 ～ 21:00	岩手大学留学生会	30
16. 5. 17	14:00 ～ 16:00	日本語指導	3
16. 6. 26	13:30 ～ 16:00	札幌大使館領事と中国留学生との交流会	10
16. 7. 3	19:00 ～ 22:00	パーティ(マレーシア留学生)	50
16. 10. 22	16:00～20:00(24 日)	大学祭	30
16. 11. 13	7:00 ～ 12:00	パーティ(イスラム)	45
16. 11. 14	7:00 ～ 12:00	パーティ(イスラム)	50
16. 11. 20	11:00 ～ 18:00	パーティ(マレーシア留学生)	50
16. 12. 12	12:00 ～ 16:00	忘年会(AVIS)	30
16. 12. 18	14:00 ～ 22:00	忘年会(中国留学生、会館居住者)	30
16. 12. 25	18:30 ～ 21:30	コンサート	40
17. 1. 3	10:00 ～ 14:30	餅つき大会(地球市民の会)	50
17. 1. 21	7:30 ～ 15:00	イスラムの祭り	60
17. 1. 22	14:00 ～ 19:30	新年会	30

4. 駐車場の管理について

会館専用の駐車場に無許可の車が常時駐車されており、環境整備等に支障をきたすので管理強化を行う。

[処置]

暫くのあいだ、教職員・学生が駐車場利用の規則を守るように、会館に関係しない車輌について「告知」及び「通告」の「張り紙」をして注意を促す。無断駐車の調査結果は主に学生で、部外者、業者(学部の教員への訪問)、学生の父兄などであった。

5. その他

5.1 環境整備

1) 台風の接近による強風のため、会館周辺の樹木の枝折れ、倒木がありその処理を行った。
2) 会館庭園の外灯整備
3) 会館庭園の除草・・・数回の刈り払い

5.2 アパート情報・説明会

国際交流会館及び国際学生宿舎入居者の入居期間は 1 年間である。両宿舎入居者(アパート居住者を含め)のために、宿舎退去後の住いを定めるために必要なアパート情報と支援環境の説明会を岩手大学生活協同組合の協力を得て行った。

日 時 : 1 月 11 日 13:30～14:30
場 所 : 岩手大学生活協同組合会議室

この説明会には20～30名程度は参加するものと期待して開催したのであるが、冬休み中であることと、計画から実行までの時間的ゆとりを持たずに実施したために、参加人員は 5 名と非常に少なかった。しかし、岩手大学生活協同組合から詳細な情報を得、また大学生協のホームページの紹介もあり、今後の情報提供の有り方を考えていくために有為な説明会であった。

(文責:主事 小笠原 洋光)

北東北国立３大学外国人留学生合同合宿研修会報告

1. 実施概要

秋田大学、岩手大学、弘前大学の国立大学法人3大学は北東北連携推進会議を結成し、3大学の連携についてさまざまな検討、事業が行なわれている。この一環として、留学生教育の連携を図ることを目的とし、北東北3大学合同合宿を平成 16 年度から開始した。第1回目は岩手大学が幹事校となり、次のような内容で実施した。

実施期間: 2004 年 11 月 13 日(土)～11 月 14 日(日)
場 所 : 独立行政法人国立青年の家岩手山青年の家
盛岡てづくり村　小岩井農場
主 催 : 北東北3大学連携推進会議教育専門委員会(幹事大学:岩手大学)
参加大学: 秋田大学　15 名(学生 13 名　引率 2 名)
弘前大学　12 名(学生 10 名　引率 2 名)
岩手大学　11 名(学生 8 名　引率 3 名)　　全 38 名

プログラム

11 月 13 日(土)　11:20　盛岡駅西口集合
12:00　岩手山青年の家到着
12:00-12:30　オリエンテーション
12:30-14:00　居室移動・昼食・休憩
14:00-17:00　研修会
①無言ゲーム(誕生日の輪・人間彫刻)
②キャンパスの多言語化プロジェクト
③大学紹介、各国の遊び紹介準備
17:00-19:00　夕食・休憩
19:00-20:00　交流会
①大学紹介
②各国の遊び紹介
20:00-21:00　自由交流(スポーツ、懇親会など)
21:00-22:00　入浴
22:30　就寝

11月14日(日)	6:30	起床
	7:30-7:45	清掃、準備
	7:45-8:30	朝食
	8:30-9:00	出発準備
	9:00	青年の家出発
	10:00-11:00	盛岡てづくり村「チャグチャグ馬コ作り体験」
	11:00-12:00	同村見学
	12:00	同村出発(小岩井農場へ移動)
	12:15-14:15	小岩井農場　昼食、見学、散策
	14:15	小岩井農場出発・帰路

岩手大学、秋田大学からの参加学生は10月に来日したばかりの短期留学生が中心であった。弘前大学からの留学生はさまざまな背景の留学生が参加した。

2. 合宿の様子

初日はオリエンテーションから始まり、施設のつかいかた、合宿のプログラムなどの注意事項を説明した。岩手山青年の家は公共の合宿研修所でタオルや上履きの持参が必要だが忘れる学生が多く予備が必要だった。

オリエンテーション終了後、各部屋に荷物を運びいれて昼食をとり、午後は研修会を行った。アイスブレークとして「誕生日の輪」(言葉を話さずに誕生日の順番に並んで輪を作る)、「好きな色」(同じく無言で好きな色の同じ人同士でグループを作る)を体験した。その後、「運ぶ人」(ある物を運んでいるジェスチャーを見せて、何を運んでいるのか当てる)、「人間彫刻」(「驚いた！」というテーマを体で表現する)などを行ない、学生同士のコミュニケーションが次第に活発になった。

次にワークショップで、3 大学のキャンパスの多言語表示についての現状分析をし、必要な多言語表示またはだれにでもわかるサインについて各グループで考え、発表した。グループはコミュニケーションが十分に進められるように、同国グループ(韓国，中国)、英語がコミュニケーション言語のグループ、日本語がコミュニケーション言語の5グループに分かれた。各大学の状況をお互いに説明し合い、多言語表示についてアイデアを出し合った。

初日の夕食後、懇親会を行った。午後のワークショップの際に、各大学の紹介と各国、地域の遊び紹介の準備をし、懇親会で紹介した。特に、各国の遊び紹介活動では、曲が屋の部屋が狭かったために思い切り動くことができなかったのが残念だったが、各国の遊びを楽しみ、好評だった。この後、体育館でスポーツを楽しむグループ、ラウンジで語り合うグループなど、さまざまに交流を深めた。

2 日目は「盛岡てづくり村」にてチャグチャグ馬子(馬の民芸品)の手作り体験をしたり、てづくり村の中の施設見学をしたりして、岩手の文化に親しんだ。その後、小岩井農場で昼食と散策を楽しんだ。

当日は天候もよく、散歩をしたり、馬や牛を見たり、アイスクリームを食べたりと、ゆっくりすごして交流を楽しんだ。

3. 参加者の反応（アンケート結果より）

合宿終了後、各大学でアンケートを実施した。（回答数　岩手8　秋田　11　弘前　7）全体的には、参加者はどの活動に対しても肯定的に捉えており、好評だった。時間が短いと感じたこと、もっと 3 大学の学生同士が積極的に交流し、意見交換、討論などがしたいという意見が特徴としてあげられる。日本語力がさまざまな学生が参加していたが、全員の共通言語は日本語である。そのため、日本語力の低い学生からは「もっと日本語力を高めたい」という学習への動機付けにもつながったようだ。学生は、合宿を通じて他大学の留学生同士が意見交換をすることに意義を感じたようで、交流、レクリエーションが主目的の活動とは異なる意義が認められた。また、引率教員からは、もっとアカデミックな内容に高めてもよかったのではないかという意見も寄せられた。次年度以降の課題である。

4. 今後について（3大学引率教職員の話し合いより）

今回の合宿は3大学としてはじめての試みであったが、今後も合宿は継続する旨、申し合わせができた。合宿当日の引率教職員の話し合いでは以下のようなことが協議された。

・来年度は弘前大学が幹事大学として実施を検討する。

・実施場所は3大学からの交通の利便性、予算を考慮して決定する。

・今年度末に3大学合同会議にて、実施に関する話し合いを持つ。

3大学は距離的に離れており、打合せを行なうのも容易ではないが、電子メール、ネット会議システムなどを利用して、学生が企画段階から参加するような合宿が実現されるよう来年度以降も連携体制を継続したい。

以上

（文責：松岡洋子）

(参考資料) 北東北3大学外国人留学生合同合宿研修会アンケート結果　(回収率　83.9%)

	岩手 8	秋田 11	弘前 7	全体 26	%
1. 合宿の時間の長さはどうでしたか。					
ちょうどよかった	2	7	5	14	53.8
短かすぎた	6	4	2	12	46.2
2. 泊まった場所はどうでしたか。					
よかった	6	4	5	15	57.7
ふつう	0	5	2	7	26.9
他の場所がよかった	1	1	0	2	7.7
どこでもいい	1	1	0	2	7.7
3. 土曜日の午後の活動(無言ゲーム＆ワークショップ)はどうでしたか。					
おもしろかった	6	7	4	17	65.4
ふつう	2	4	3	9	34.6
4. 土曜日の夜の懇親会(大学紹介＆各国のゲーム紹介)はどうでしたか。					
おもしろかった	7	9	5	21	80.8
ふつう	1	1	2	4	15.4
どんな活動でもいい	0	1	0	1	3.8
5. 日曜日午前の「盛岡手作り村」はどうでしたか。					
おもしろかった	7	8	6	21	80.8
ふつう	1	2	1	4	15.4
違う場所の方がいい	0	1	0	1	3.8
6. 日曜日午後の「小岩井農場」はどうでしたか。					
おもしろかった	5	9	4	18	69.2
ふつう	3	1	1	5	19.2
違う場所の方がいい	0	1	2	3	11.6

7. 感想

・時間が短すぎて十分交流できなかったので、もっと時間を長くしてほしい(多数意見)

・日本語をもっと勉強して意見交換ができるようになりたい

・他大学の人と交流できるような企画をもっと多くしてほしい(多数意見)

・宿泊の部屋割りは大学別ではなく、混ざった方がおもしろい(複数意見)

・もっと討論や意見交換をしたい(多数意見)　・食事がおいしかった

・他大学の人との交流はとても貴重で、おもしろい(複数意見)

・景色がきれいでよかった　・留学生同士の交流は日本人とのよりおもしろい

平成１６年度岩手大学外国人留学生実地見学旅行実施計画

１．目　　的　　岩手大学に学ぶ留学生に対する教育活動の一環として、我が国の現状を実際に見学し、留学生の日本に対する視野を深める。更に留学生相互と留学生活の適応と留学生教育の効果を高めることを目的とする。

２．期　　日　　平成１６年９月１日（水）から９月３日（金）まで（２泊３日）

３．旅行先及び見学場所

北海道

小樽：小樽運河、北一ｶﾞﾗｽ・ｵﾙｺﾞｰﾙ堂

札幌：札幌時計台、道庁、北海道大学

４．参加人数

留学生　　４２名

教職員　　３名

５．参 加 費　　１０，０００円

６．宿泊場所　　９月１日（水）フェリー泊

９月３日（金）アパホテル＆リゾート

７．交通機関　　借上げバス、フェリー

８．日　　程　　別紙日程表のとおり

９．経　　費

旅　　費（教職員）　職員旅費

（留学生）　留学生経費（講師等旅費）

バス借上料　　留学生経費

留学生実地見学旅行日程表

月日	時刻	行程
1日目	17：30	学生センター前集合
9／1	18：30	大学出発　東北自動車道
(水)	21：00	八戸港到着
	22：00	八戸港出発
2日目	6：30	苫小牧港着（朝食・洗面）
9／2	7：20	苫小牧港出発
(木)	8：00	アイヌ民族博物館見学
	11：00	小樽運河見学
	11：30	小樽運河出発
	11：50	小樽ポートマーケット（昼食）
	12：50	北海道大学見学（博物館他）
	14：50	北海道大学出発
	15：00	札幌ビール工場見学
	16：00	札幌ビール工場出発
	16：10	札幌大通り公園、時計台他見学
	18：00	アパホテル＆リゾート（TEL 011-571-3111）
3日目	7：40	ホテル出発
9／3	10：40	昼食（長万部）
(金)	14：10	函館港出発（フェリー）
	18：35	青森港着
	21：30	岩手大学学生センター着（解散）

平成１６年度岩手大学外国人留学生スキー研修実施要項

目　　的　　岩手大学に学ぶ外国人留学生が、母国でほとんど経験することがないスキーを通じて、雪国である岩手の冬に親しむ。更に、留学生相互と日本人学生並びに教職員との交流を図り、留学生活の適応と留学生教育の効果を高めることを目的とする。

内　　容　　スキー実技指導

期　　日　　平成１７年１月５日（水）～１月７日（金）（２泊３日）

実施場所　　安比高原スキー場（岩手郡安代町安比高原　　TEL　0195-73-5111）

宿泊場所　　安比グランドホテル（岩手郡安代町安比高原　TEL　0195-73-6511）

講　　師　　工学部助教授　　藤田尚毅
　　安比高原ｽｷｰ場ｽｷｰ指導員　　７名

参加者　　外国人留学生、チューター　　約４０名

参加費　　５，４００円（徴収金額　21,000円）
　　（うち 15,600円はスキー研修終了後、
　　旅費として個人口座に振り込まれる。）

統導者　　工学部助教授　　藤田尚毅
　　国際交流ｾﾝﾀｰ助教授　　小笠原洋光
　　国際課　　吉田京、千葉敬司

日程表　　別紙のとおり

移　　動　　借り上げﾊﾞｽ（安比高原スキー場所有）

経　　費　　（運）教育経費　留学生経費
　　・借り上げバス
　　・スキー１式（スキー板・ストック・靴）
　　・留学生宿泊費（食事含）
　　（運）教育経費　留学生経費
　　職員旅費
　　・統導職員　３名
　　講師等旅費
　　・講師　１名
　　諸謝金
　　・安比高原ｽｷｰ場ｽｷｰ指導員　７名

平成１６年度岩手大学外国人留学生スキー研修日程表

【第１日目】１月５日（水）

９：００	学生センター集合（時間厳守）
９：２０	学生センター出発
１０：３０	安比グランドホテル到着
１１：００	オリエンテーション
１１：３０	各自の荷物を部屋へ
	スキー研修準備
１２：００	
	昼食（各自）
１３：００	
	スキー研修（スキー指導員による実技指導）
１６：００	
	自由（入浴など）
１８：００	夕食・交流

【第２日目】１月６日（木）

７：３０	朝食
９：００	
	スキー研修（スキー指導員による実技指導）
１２：００	
	昼食（各自）
１３：００	
	スキー研修（スキー指導員による実技指導）
１６：００	
	自由（入浴など）
１８：００	夕食・交流

【第３日目】１月７日（金）

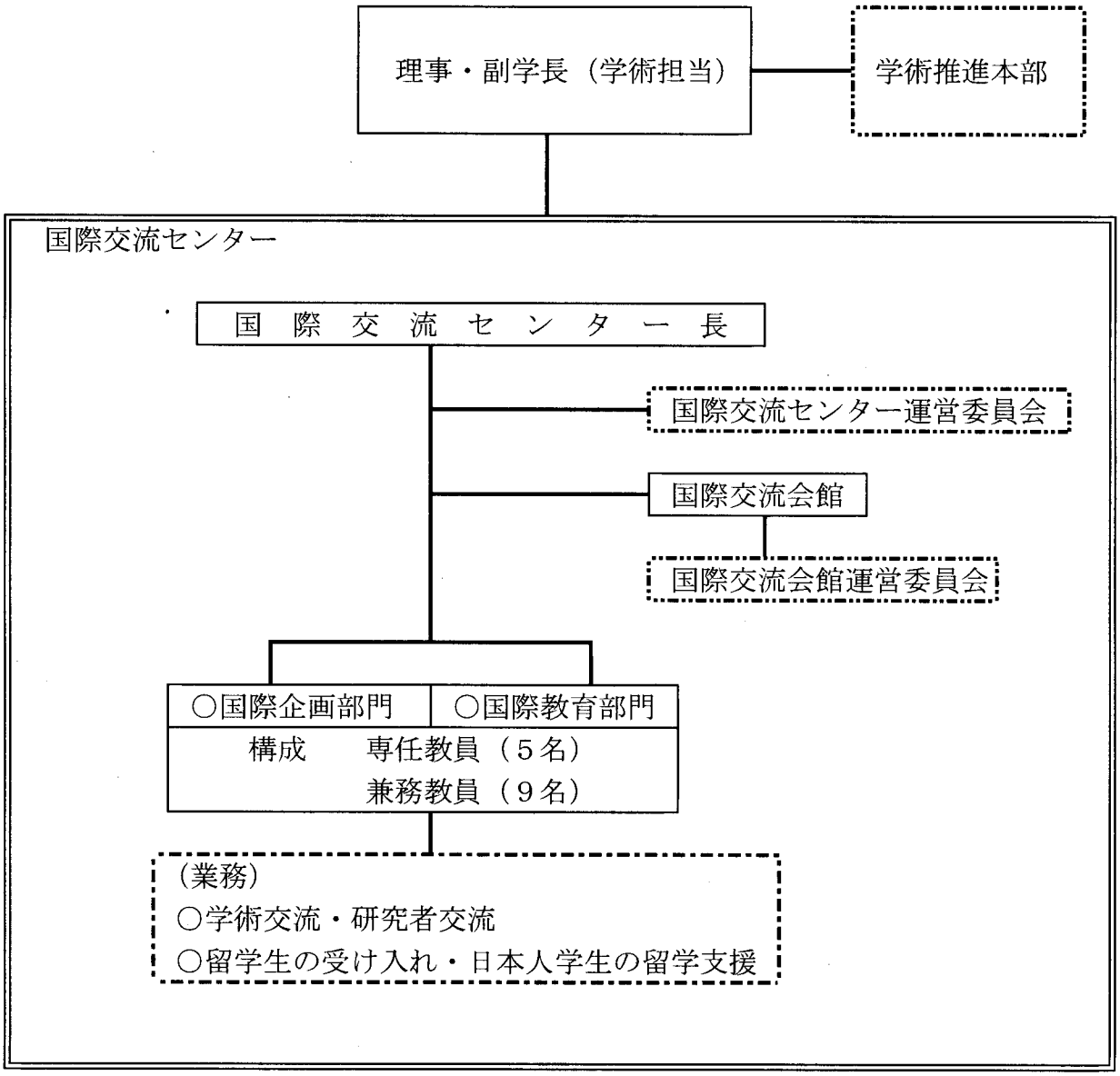
７：３０	朝食
９：００	
	スキー研修（スキー指導員による実技指導）
１２：００	
	昼食（各自）
１２：４０	
	出発準備
１３：００	安比高原スキー場出発
１４：２０	学生センター到着・解散

国際交流センター設置構想及び組織図

○　国際交流センター設置構想

積極的かつ自立的に地球市民としての責任を果たせる人材の養成機能に加え，研究を通じて国際社会の発展に貢献することを目的に，留学生センターを拡充して教育研究活動に関わる国際化推進の諸課題に取り組む。

○　国際交流センター組織図



平成16年度留学生関連行事

実施月日	行　事　名
４月　１日（木）	学年開始、２年次以上前期授業開始
２日（金）	特別コースプレースメントテスト
初旬	４月入学留学生の諸手続き
７日（水）	岩手大学入学式
８日（木）	特別コースプレースメントテスト
８日（木）～９日（金）	新入生オリエンテーション
１２日（月）	１年次・編入生授業開始
〃	日本語研修コース開講式（新規）
〃	日本語研修コース前期授業開始（新規）
１６日（金）	外国人留学生オリエンテーション・交歓会
２８日（水）	国際交流会館オリエンテーション
５月１０日（月）	チューター・会話パートナーオリエンテーション（日本人学生）
１３日（木）～１４日（金）	海外留学オリエンテーション（日本人学生）
２０日（土）	ロードレース
２８日（金）	岩手県留学生交流推進協議会運営委員会
６月　１日（水）	開学記念日
１７日（木）～１８日（金）	留学生交流研究協議会（北海道・東北・関東地区）（山形）
２６日（土）	オープンキャンパス
２７日（日）	留学生ガーデンパーティー
７月　１日（木）	岩手県留学生交流推進協議会総会・交流懇談会
２０日（火）	着物着付け体験
２３日（金）	日本語研修コース・日研生コース修了発表会
８月　３日（火）	さんさ踊り（留学生参加）
５日（木）	夏季休業（８／５～９／３０）
８日（日）～９日（月）	岩手県留学生交流推進協議会留学生合宿研修会（県内留学生）
９月　１日（水）～３日（金）	外国人留学生見学旅行（北海道）
５日（日）	外国人留学生のための進学説明会（東京）
１０日（金）、１２日（日）	日本留学フェア（釜山、ソウル）
２１日（火）	日本語研修コース及び日本語・日本文化研修コース修了式
１０月　１日（金）	後期授業開始
１２日（火）	国際交流科目（日本語）後期授業開始
１３日（水）	日本語研修コース、日研生コース後期授業開始
１４日（木）	SICE ハローパーティ
１５日（金）	日本語研修コース及び日研生コース開講式
〃	外国人留学生オリエンテーション・ウェルカムパーティ
〃	タイ・タマサート大学との交流会
２３日（土）～２４日（日）	不来方祭・オープンキャンパス
２８日（木）	国際交流会館オリエンテーション
１１月　６日（土）～７日（日）	日本留学フェア（タイ）
１３日（土）～１４日（日）	北東北国立３大学合同合宿研修会（岩手山青年の家）
２７日（土）	国際交流会館避難訓練
１２月２４日（金）	冬季休業（１２／２４～１／１４）
１月　５日（水）～７日（金）	外国人留学生スキー研修旅行（安比高原スキー場）
１５日（土）～１６日（日）	大学入試センター試験
２月　８日	春節祭
１７日（木）	日本語研修コース修了発表会
２５日（金）～２６日（土）	個別学力試験（前期日程）
３月１２日（土）～１３日（日）	個別学力試験（後期日程）
１４日（月）	日本語研修コース修了式
１６日（水）	学長と岩手大学外国人留学生代表との懇談会
〃	外国人留学生卒業（修了）生送別会
２３日（水）	卒業式・修了式
２４日（木）	春季休業（３／２４～３／３１）

外国人留学生集計表（平成17年4月1日現在）

岩手大学

1. 総　数　197 (73) 人

2. 学生種別

学部		人文社会科学部			教育学部			工学部			農学部			国際交流センター			小計			計
		国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	
正規生	学部学生	1 (1)		12 (8)			3 (1)	1	19 (6)	23 (6)			5 (3)				2 (1)	19 (6)	43 (18)	64 (25)
	別科																			
非正規生	研究生	1 (1)		1 (1)	1 (1)			1		1							3 (2)		2 (1)	5 (3)
	日本語研修生													6 (1)			6 (1)			6 (1)
	日研生																			
	科目等履修生			2			1			1									4	4
	特別聴講学生			3 (3)			2 (2)							2 (2)		2 (1)	2 (2)		7 (6)	9 (8)
小計		2 (2)		18 (12)	1 (1)		6 (3)	2	19 (6)	25 (6)			5 (3)	8 (3)		2 (1)	13 (6)	19 (6)	56 (25)	88 (37)
計		20 (14)			7 (4)			46 (12)			5 (3)			10 (4)			88 (37)			

大学院		人文社会科学研究科			教育学研究科			工学研究科			農学研究科			連合農学研究科			小計			計
		国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	
正規生	修士課程			7 (4)	1 (1)		10 (7)				3 (1)		5 (3)				4 (2)		22 (14)	26 (16)
	博士前期課程							1		16 (2)							1		16 (2)	17
	博士後期課程							8 (1)		15 (4)				19 (4)	3	17 (6)	27 (5)	3	32 (10)	62 (15)
非正規生	研究生				1 (1)											1	1 (1)		1	2 (1)
	特別聴講学生						1 (1)						1 (1)						2 (2)	2 (2)
小計				7 (4)	2 (2)		11 (8)	9 (1)		31 (6)	3 (1)		6 (4)	19 (4)	3	18 (6)	33 (8)	3	73 (28)	109 (36)
計		7 (4)			13 (10)			40 (7)			9 (5)			40 (10)			109 (36)			

岐阜連合獣医学研究科	国費	政府	私費
小計	1 (1)		

連合農学研究科配属別内訳（岩手配属　18 名、他大学配属　22 名）

配属別 経費別	岩手大学			帯広畜産大学			弘前大学			山形大学			計
	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	
人数	10 (2)	2	6 (1)	4 (2)		8 (5)	4 (1)	1	2	1		2	
計	18 (3)			12 (7)			7 (1)			3			40 (11)

3. 国籍別　31 ヶ国　1地域　197 (73) 人　{1(1)}

アジア 176 (66) 人				アメリカ 9 (2) 人		アフリカ 7 (1) {1(1)} 人		ヨーロッパ 5 (3) 人	
インドネシア	4	バングラデシュ	9 (1)	ブラジル	2 (1)	ケニア	1 (1)	アルバニア	1
韓国	7 (3)	フィリピン	1	ハイティ	1			ロシア	2 (2)
カンボディア	2	ヴェトナム	1 (1)	アルゼンティン	2 (1)	エジプト	1	スロヴァキア	1
タイ	3 (1)	マレイシア	23 (7)	メキシコ		ザンビア	{1(1)}	カザフスタン	1 (1)
中国	117 (48)	イラン	1	グアテマラ	1	マダガスカル	1		
スリランカ	1 (1)	モンゴル	5 (3)	ウルグアイ	1	ガーナ	2		
		台湾	1	アメリカ	2	南アフリカ	1		
		ミャンマー	1 (1)			タンザニア	1		

{ }は岐阜大学大学院連合獣医学研究科在籍者で外数　　( )は女で内数

「 」は在留資格「留学」以外の在籍者で外数

4. 経費別

国費	46 (14)	(37 (11))
政府	22 (6)	(21 (6))
私費	129 (53)	(117 (48))
計	197 (73)	(175 (65))

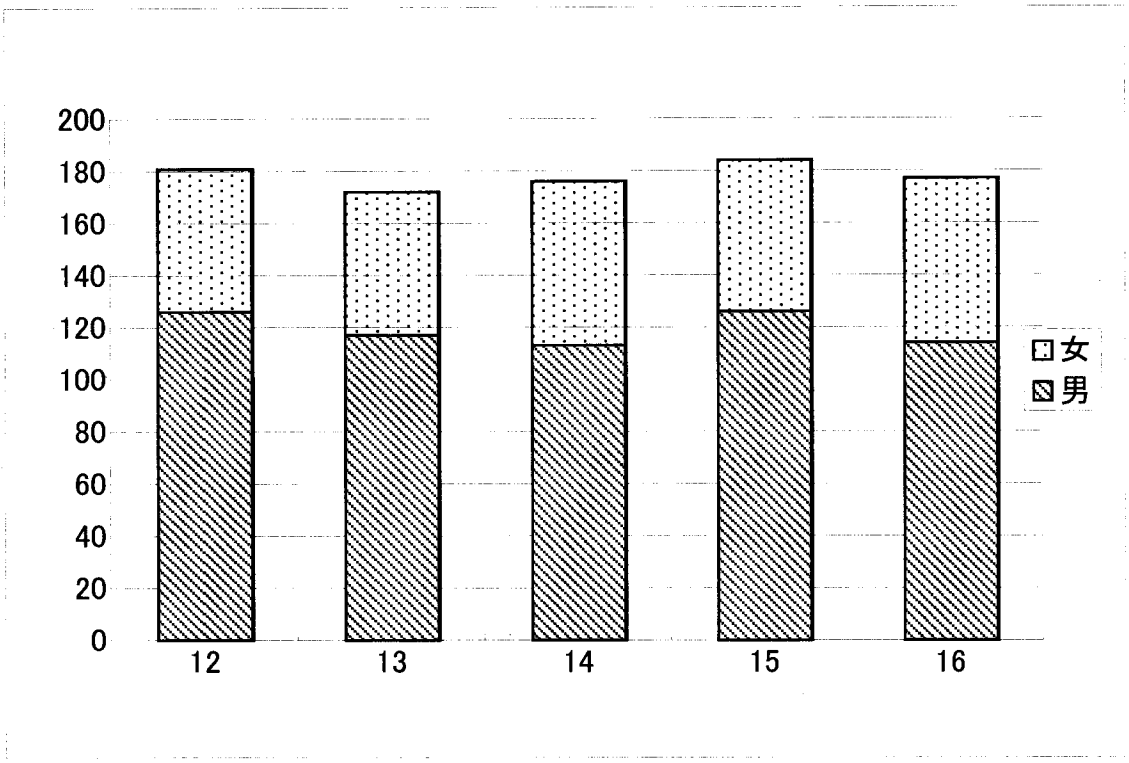
( )は他大学配属除いた数

※工学部
学部学生・国費1名（男）は日韓共同理工系学部学生

過去5年間の男女別留学生数(各年5月1日現在)

年度	12	13	14	15	16
男	126	117	113	126	114
女	55	55	63	58	63
計	181	172	176	184	177

外国人留学生の推移



経費別留学生数

年度	国費	私費			計
		政府派遣	県費	その他	
12	59	12	0	110	181
13	60	11	1	100	172
14	52	15	0	109	176
15	58	21	1	104	184
16	43	18	0	116	177

外国の大学との交流 Academic Cooperation between Universities/Faculties

大学間協定 Universities

国名 Country	大学等名 Name of University	締結年月日 Date of Agreement	主な交流内容 Contents of Exchanges	
			学術交流 Academic Exchange	学生交流 Student Exchange
中華人民共和国 People's Republic of China	山西大学 Shanxi University	2001.10.11	○	
	曲阜師範大学 Qufu Normal University	2002.9.25	○	○
	北京大学・石河子大学 Beijing University ・ Shihezi University	2003.12.5	○	
	西北大学 Northwest University	2003.12.9	○	
大韓民国 Republic of Korea	国立麗水大学校 Yosu National University	2001.10.17	○	
	明知大学校 Myongji University	2004.7.13	○	○
タイ王国 Kingdom of Thailand	サイアム大学 Siam University	2002.7.2	○	-
ロシア Russia	サンクト・ペテルブルグ国立文化芸術大学 St. Petersburg State Academy of Culture	2005.3.28	○	○
アメリカ合衆国 The United States of America	オーバン大学 Auburn University	1998.11.6	○	
	アーラム大学 Earlham College	2003.8.11	○	
	テキサス大学オースティン校 The University of Texas at Austin	2004.10.20	○	○
カナダ Canada	セント・メアリーズ大学 Sainto Mary's University	2003.7.31	○	○

部局間協定 Faculties

部局名 Faculty in Charge	国名 Country	大学等名 Name of University	締結年月日 Date of Agreement	主な交流内容 Contents of Exchanges	
				学術交流 Academic Exchange	学生交流 Student Exchange
教育学部 Education	中華人民共和国 People's Republic of China	北京大学 Beijing University	1998.8.21	○	
		清華大学 Tsinghua University	2000.12.15	○	○
		寧波大学 Ningbo University the Faculty of Foreign Languages	2004.3.17	○	○
	アメリカ合衆国 The United States of America	ノース・セントラル・カレッジ North Central College	2002.9.6	○	○
	カナダ Canada	ブリティッシュ・コロンビア大学 The University of British Columbia	2001.7.17	○	
工学部 Engineering	中華人民共和国 People's Republic of China	西安建築科技大学 Xian University of Architecture and Technology	1999.6.25	○	
		中国科学院地理科学与資源研究所 Institute of Geographical Sciences and Natural Resources, Chinese Academy of Sciences	2000.2.24	○	
		中国科学院蘭州化学物理研究所 Lanzhou Institute of Chemical Physics, Chinese Academy of Sciences	2002.9.26	○	
		北京大学化学与分子工程学院 Beijing University College of Chemistry and Molecular Engineering	2003.3.19	○	
		新疆農業大学 Xinjiang Agricultural University	2003.11.11	○	

		西安交通大学 Xian Jiaotong University	2001. 5.30	○	
		華南理工大学 South China University of Technorogy	2004.7.6	○	
		新疆大学機械工程学院 Xinjiang University college of Mechanical Engineering	2004.7.19	○	
	大韓民国 Republic of Korea	ハンバット大学校新素材工学部 Hanbat National University, Division of Advanced Material Engineering	1999.3.19	○	
	タイ王国 Kingdom of Thailand	チュラロンコン大学 Chulalongkorn University	2002.1.10	○	
	ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｼｭ 人民共和国	ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｼｭ工科大学工学部 Faculty of Engineering, Bangladesh University of Engineering and Technology	2003.12.23	○	
	ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany	デュッセルドルフ大学 Heinrich Heine University of Dusseldorf	1999.8.30	○	
		ﾌﾗｳﾝﾎｰﾌｧｰ非破壊検査技術研究所 Fraunhofer-Institute for Nondestructive Testing	2004.3.12	○	
	フランス共和国 Republic of France	ピエール・エ・マリーキューリ大学 Pierre & Marie Curie University	1997.4.19	○	
	ポーランド共和国 Republic of Poland	ポーランド科学アカデミー Polish Academy of Science	1995.3.3	○	
農学部 Agriculture	中華人民共和国 People's Republic of China	吉林農業大学 Jilin Agricultural University	1986.9.13	○	○
	アメリカ合衆国 The United States of America	パデュー大学 Purdue University. School of Agriculture	1996.4.4	○	○
地域連携推進センター Center for Regional Collaboration in Research and Education	中華人民共和国 People's Republic of China	上海高分子材料研究開発センター Shanghai Research and Development for Polymeric Materials	2001.3.1	○	
		大連理工大学鋳造技術研究センター Engineering Research Center for Foundry Dalian University of Technology	2003.3.26	○	
	大韓民国 Republic of Korea	慶北大学トライボロジー研究所 Engineering Tribology Research Institute Tyungpook National University	1996.5.31	○	
		成均館大学校技術革新センター Technology Innovation Center, Sungkyunkwan University	2000.6.23	○	
		東亜大学校産学協力研究センター Center for Cooperative Research and Development Dong-A University	2002.3.25	○	
		ハンバット大学校産学協力総合センター Hanbat National University Cooperative Research Center	2002.10.23	○	

平成16年度岩手大学海外派遣・留学プログラム一覧

プログラム名	派遣先	参加資格	派遣国	協定の有無	目的	単位認定	派遣時期	派遣期間
サンクト・ペテルブルグ交換留学プログラム	**サンクト・ペテルブルグ国立文化芸術大学**	**人社2～4年生・院生**	**ロシア**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**4月又は9月**	**3ヶ月～1年間**
英語研修	セントラル・ミシガン大学	全学	米国	未	英語研修	あり	8月25日～9月28日	5週間
英語研修	ビクトリア大学英語研修センター	全学	カナダ	なし	英語研修	あり	8月頃	3週間
英語研修	ブリティッシュ・コロンビア大学英語研修センター	全学	カナダ	なし	英語研修	あり	3月または8月～9月	28日間
モナシュ大学英語研修	モナシュ大学英語研修センター	全学	オーストラリア	なし	英語研修	あり	3月と8月頃	5週間
リバプール大学科目研修	リバプール大学文学部英語学科(TESL中心)	人社	イギリス	あり	科目研修	なし	4月～	1年間
国語科実地研修	国語の教科書に出てくる場所など	教育	中国		現地見学	あり	3月頃	10日間
短期中国語研修	清華大学	全学	中国	あり	中国語研修	なし	8月頃	1ヶ月
日本語教育実習	清華大学	教育	中国	あり	日本語教育実習	あり	3月頃	2週間
短期派遣	**清華大学**	**教育**	**中国**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**8月頃**	**1年間**
短期派遣	**曲阜師範大学**	**教育**	**中国**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**8月頃**	**1年間**
短期派遣	**吉林農業大学**	**農学**	**中国**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**8月頃**	**1年間**
国際研修	モナシュ大学英語研修センター	工学部2・3年生	オーストラリア	なし	英語研修	あり	8月頃	4週間
パデュー大学学生派遣	パデュー大学	農学	米国	あり	交換留学	あり	8月頃	1ヶ月
短期派遣	**明知大学校**	**全学**	**韓国**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**9月頃**	**半年以上1年以内**
短期派遣	**テキサス大学**	**全学**	**米国**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**8月中旬**	**1年間**
短期派遣	**アーラム大学**	**全学**	**米国**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**8月中旬**	**1年間**
短期派遣	**セント・メアリーズ大学**	**全学**	**カナダ**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**8月中旬**	**1年間**
短期派遣	**寧波大学**	**教育**	**中国**	**あり**	**交換留学**	**あり**	**8月**	**1年間**
中国語研修	**西北農林科技大学**	**全学**	**中国**	**なし**	**中国語研修**	**なし**	**8月**	**3週間**

注:ゴシック表示のプログラムは協定校との交換プログラム

(作成:尾中夏美)

平成 16 年度海外学生派遣実績

	短期語学・文化研修		長期派遣(半年～1 年)	
人文社会科学部	オーストラリア	13	韓国	1
	カナダ	2	ロシア	1
	中国	2		
教育学部	米国	1		
	中国	1		
農学部	米国	1	中国	1
工学部	オーストラリア	21		
	中国	1		

(作成:尾中夏美)

岩手大学留学生地域派遣実績一覧（平成16年度）

派遣先	派遣日程	交流児童・生徒数	派遣留学生数(含家族)	国別人数	交流の内容
杜陵小学校	4月～12月（毎金21回）	54	1	インドネシア	異文化理解
岩大付属幼稚園	5月～11月（毎水）	155	1	インドネシア	
杜陵高校	4月～2月（毎月水）	13	3	韓国、中国ウィグル、モンゴル	異文化理解
秋田市立外旭川中学校	5月18日	6	4	チェコ、中国、アルゼンチン、ロシア	留学について
東松園小学校	5月21日	54	1	インドネシア	異文化理解
中野小学校	5月28日	123	1	中国	英語教育
もりおか老人大学上田分校	5月30日	24	1	メキシコ	異文化理解
江刈中学校	6月3日	67	3	インドネシア、中国、韓国	異文化理解・英語教育
見前南小学校	6月8日	150	3	メキシコ、バングラデシュ、インドネシア	異文化理解
下の橋中学校	6月15日	32	1	メキシコ	異文化理解・英語教育
東松園小学校	6月16日	56	1	韓国	異文化理解
太田小学校	6月25日	38	3	インドネシア、中国、マレーシア	異文化理解
留学生ガーデンパーティー	6月27日	100	40		異文化理解
黒沢尻東小学校	7月3日	50	9	中国、韓国、インドネシア、マレーシア、ロシア、チェコ、メキシコ	異文化理解
シルクロード音楽会	7月6日	350	10	中国ウィグル	異文化理解
ふうりん保育園	7月7日	50	3	中国、メキシコ	異文化理解
東松園小学校	7月8日	71	2	中国	異文化理解
小軽米中学校	7月9日	71	5	ブラジル、中国、中国ウィグル、メキシコ、バングラデシュ	英語教育
みちの会料理交流会	7月10日	15	8	中国	異文化理解
岩谷堂農林高校	7月20日	30	1	メキシコ	技術教育
下の橋中学校	7月23日	32	1	バングラデシュ	異文化理解・英語教育
ハイスクールボランティア　イン　テンパーク	8月9日～10日	60	3	マレーシア、ロシア、中国	異文化理解
岩谷堂農林高校	8月14日	30	1	メキシコ	技術教育
岩谷堂農林高校	8月16日	30	1	メキシコ	技術教育
盛岡商業高校	8月25日	35	1	メキシコ	技術教育
緑ヶ丘4丁目公民館	8月26日	15	4	バングラデシュ、インドネシア、韓国、スーダン	異文化理解
本宮小学校	9月1日	65	2	バングラデシュ	異文化理解
盛岡女子高校	9月2日	7	1	バングラデシュ	異文化理解・英語教育

高松小学校	9月3日	72	10	中国、チェコ、インドネシア、ロシア、ウィグル、韓国	異文化理解
高松小学校	9月8日	72	10	中国、チェコ、インドネシア、ロシア、ウィグル、韓国	異文化理解
東松園小学校	9月8日	60	1	中国	異文化理解
高松小学校	9月15日	69	4	タイ、中国、メキシコ、モンゴル	異文化理解
東松園小学校	9月15日	67	1	中国	異文化理解
高松小学校	9月27日	69	4	タイ、中国、メキシコ、モンゴル	異文化理解
中川小学校	9月28日～30日	25	1	メキシコ	地域学習実習
猿石中学校	9月28日～30日	50	1	メキシコ	地域学習実習
下の橋中学校	9月29日	32	1	中国	異文化理解・英語教育
一関あいぽーと川のイベント	10月10日	40	17	インドネシア、メキシコ、ロシア、バングラデシュ、ウィグル、中国、マレーシア	異文化理解
高校生カルチャーキャンプ	10月12日	80	19	中国、ロシア、マレーシア、バングラデシュ、ウィグル、メキシコ、モンゴル、インドネシア、	異文化理解
盛岡大学星陵祭	10月16日	100	6	インドネシア、アルゼンチン、モンゴル、中国	異文化理解
ホット地球市民カフェ	10月16日	35	7	メキシコ、ブラジル、中国	異文化理解
もりおか老人大学上田分校	10月18日	25	1	メキシコ	異文化理解
東松園小学校	10月18日	71	2	中国	異文化理解
ハレルヤ保育園	10月20日	23	2	中国、インドネシア	異文化理解
城北小学校	10月25日	129	9	韓国、アルゼンチン、バングラデシュ、ロシア、中国	異文化理解
杜陵高校	10月27日	50	1	メキシコ	異文化理解
東松園小学校	11月11日	43	2	中国、韓国	異文化理解
中野小学校	11月19日	109	1	インドネシア	異文化理解
岩手シルバーカレッジ	11月19日	50	3	中国、ロシア	異文化理解
大船渡海に開こうイベント	11月20日～21日	50	5	中国、インドネシア、ロシア	異文化理解
中野小学校	11月22日	40	1	メキシコ	英語教育
平成16年度滝沢村社会教育事業国際交流講座「マレーシア編」	11月20日～12月11日（毎土4回）	20	1	マレーシア	異文化理解
明るい社会を作る会・盛岡	11月21日	100	2	バングラデシュ、中国	その他
山口小学校（5・6年生）	11月26日	143	3	バングラデシュ、ブラジル、カザフスタン	異文化理解
永井小学校	11月24日	105	2	メキシコ、インドネシア	異文化理解

城南小学校	12月6日	31	1	タイ	異文化理解
永井小学校	12月8日	133	2	バングラデシュ、中国	異文化理解
サークルU料理会	12月12日	40	13	中国、ウィグル、バングラデシュ、インドネシア、	異文化理解
牧の林すずの音保育園	12月16日	108	3	メキシコ、バングラデシュ、ブラジル	異文化理解
じょいフェスティバル	12月21日	50	100	中国、韓国、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、バングラデシュ、スーダン、エジプト、ロシア、メキシコ	異文化理解
ボーイスカウト	1月16日	35	1	オマーン	異文化理解
盛岡女子高校	2月4日	35	1	メキシコ	異文化理解
日中合同春節祭	2月8日	170	73	中国、ロシア、	異文化理解
附属小学校	2月14日	80	1	メキシコ	英語教育
大慈寺小学校	2月17日	37	1	インドネシア	異文化理解
北松園中学校	2月25日	155	42	中国、中国ウィグル、韓国、バングラデシュ、ロシア、マレーシア、インドネシア、フィリピン、モンゴル、メキシコ、ハイチ、グアテマラ、ブラジル、アルゼンチン、マダガスカル	異文化理解
のべ参加人数		4386	470		

幼稚園・保育園対象	4
小学校対象	29
中学校対象	7
高校対象	9

（担当：岡崎正道・尾中夏美）

執筆者一覧

猪内正雄(ししうち　まさお)	国際交流センター長(理事・副学長)
岡崎正道(おかざき　まさみち)	国際交流センター教授(教育部門長)
尾中夏美(おなか　なつみ)	国際交流センター助教授(国際企画部門長)
小笠原洋光(おがさわら　ひろみつ)	国際交流センター助教授
松岡洋子(まつおか　ようこ)	国際交流センター助教授
中村ちどり(なかむら　ちどり)	国際交流センター助教授

岩手大学国際交流センター報告第1号

2005年4月発行

編集・発行　岩手大学国際交流センター (Iwate University International Center)

〒 020-8550　岩手県盛岡市上田3丁目18番34号

Tel 019-621-6290 ／ Fax　019-621-6297

IUIC

Iwate University International Center